

以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

反訴及其ノ答辯書ノ文例ハ第九十條第九十九條ノ各文例ニ準ス

(注意、反訴ハ答辯書中ニ其趣旨ヲ記シ訴フルモ又ハ口頭辯論ノ日口頭ニテ訴フルモ可ナリ)

第二百二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生ス可キトキハ此限ニ在ラス一九〇一、二〇一、二〇六、二〇七

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ伸長シ又第九十四條ニ定メタル期間ヲ切迫ナル危険ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコトヲ得一七〇、一七一

前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

本條ノ期間短縮伸長ノ申立及命令ノ文例ハ第七十一條ノ各文例ニ準ス

第二百四條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルトキハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ一九〇、一九九、七五、一九四、二四五、一、一六四、二二二

準備書面補充書(數通ヲ提出ス可シ)

年(何第何號何々事件ニ付キ(訴狀)(答辯書)ニ立サル(事實上ノ主張)(證據方法)ヲ左ニ陳述ス何々(事實上ノ主張又ハ證據方法)

右ノ如ク(訴狀)(答辯書)何々ヲ補充仕候也

年月日

(原告、被告)人 氏 名

何裁判所 判所 氏 名殿

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

第二百五條 口頭論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス三〇九以下三三二、一六

第二百六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ之ヲ提出ス可シ

左ニ掲クルモノヲ妨訴ノ抗辯トス一〇、三三二、三七九

第一 無訴權ノ抗辯七八六

第二 裁判所管轄違ノ抗辯二二二

第三 權利拘束ノ抗辯一九五

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯四三、四七

第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯八七、九〇

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未濟ノ抗辯一九八、五

第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有効ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張ス

ル能ハサリシコトヲ説明スルトキニ限り之ヲ主張スルコトヲ得

何々請求ノ訴ニ對スル妨訴ノ抗辯

府縣市町村番地族業

申立人 氏

名

府縣市町村番地族業

被申立人 氏

名

年何第何號何々事件ニ付キ妨訴ノ抗辯ノ事實理由左ニ陳述ス

事實及ヒ理由

何々タレハ司法裁判所へ訴フ可キモノニアラス(事實理由ヲ記ス)

一定ノ申立

右ノ事實理由ナルヲ以テ本案訴訟ヲ棄却ストノ判決相成度候也

立 証

何々

年 月 日

申立人 氏

名

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ二〇六、三九六、三九七、四三二、四三三、二二八

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ闕シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

本案ノ判決ハ第二百三十六條ノ文例ニ準ス

第二百八條 裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリタルトキハ其完結後之ヲ爲ス 二六六、二七二

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、再抗辯等)ハ第二百一條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコトヲ得 一七三

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得 四一五、四二六、四二七

本案ノ申立ハ口頭辯論ノ時原告ヨリ口頭ニテ却下ノ申立ヲナセハ可ナリ此ノ申立アレハ裁判所ハ口頭ニテ却下ノ旨渡チナフコトヲ得然ルモハ書記ハ調査ニ其旨ヲ記簿ス故ニ別ニ申立及却下ノ文例ヲ掲ケサルナリ(一三〇ノ一五號、一三五)

第二百十一條 訴訟ノ進行中ニ争ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ホストキハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定セシコトヲ申立ツルコトヲ得 二〇九、二二二、一九五、四一六、三一、二〇〇ノ二

本案ノ豫案確定ノ訴「原告ノ訴ノ申立ノ擴張」ハ第九十條ノ訴狀ノ文例ニ、「被告ノ反訴」ハ第三百一條ノ文例ニ、其判決ノ文例ハ共ニ第二百三十六條ノ文例ニ準ス可シ

第二百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル一九六、二〇一、二〇四、二一一

第二百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン爲ニ用キントスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ一一二、一一五、各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ二八九、一三七二

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得一七三、二〇九、三四七  
證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二十條ノ規定ヲ準用ス二一〇、七五

第二百十五條 證據調並ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ二七四ノ二、二七六、一三六四

本案ノ證據調手續キノ命令ハ口頭辯論ノ際裁判官口頭ニテ言渡シ記書ハ調書ニ其命令スルヲ以テ別ニ文例ヲ示サス

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲ス可シ二七三、二八七、二九六、三二八、三三一、三四八、三五八ノ二

受命判事又ハ受托判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ一〇九ノ三

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限りハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ二六一ノ二、三三、一三四、一五五ノ二、一七八、三、二一八、二四八、

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證ス可シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

市、九一、町、村、一〇

第二百二十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明スヘキトキハ裁判官ヲシテ其主張ノ眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出ツルヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ疏明方法トシテハ之ヲ許サス  
三五、五七ノ二、一七七一、一七六ノ二、二〇六、一  
三、二二四ノ二、二七二ノ二、二八四ノ二、三〇  
〇ノ一、三〇四ノ二、三四四、三四六ノ三、三六七、三七二ノ一、四一四ノ一、四一六、四七七、五〇〇ノ二、  
五〇三、五四四、五四七ノ二、五四九、四、五六五、七〇六ノ二、七五〇、七四〇ノ二、七五六、七八〇、八〇、  
七七四

第二百二十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受托判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争點ノ和解ヲ試ムル權アリ和解ヲ試ムル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルスルコトヲ得  
三八一、六二ノ二、一三〇、五五九、七五、  
人訴、二二、一三、二六、

第二百二十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス  
二二七、  
一九〇、一九六、三八〇、一

書面ニ掲ケサル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ綴出シテ之ヲ爲

スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シニ三一  
本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス

判決ヲ受クヘキ事項ノ申立

年何第何號何々事件ニ付キ準備書面ニ掲ケサル判決ヲ受クヘキ重要ナル事項左ノ如シ

第一 何々

第二 何々

右事項ニ付キ判決相成度候也

年月日

(原告、被告)人 氏 名

何裁判所 判事 氏 名 殿

第二百二十三條 前條ノ申立ヲ除ク外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異カ附加、削除其他ノ變更ニ係ルヲ問ハス申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附ス可キ爲メ差出シタル書

實例民事訴訟法 第一ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

面ニ依リテ之ヲ明確ニス可シ

第二百二十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閲覽シ且裁判所書記ヲシテ其正本、抄本及ヒ贄本ヲ付與セシムルコトヲ得五二、六二、四五五

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキニ限り當事者ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閲覽及ヒ其抄本並ニ贄本ノ付與ヲ許スコトヲ得五九、六一

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類並ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト贄本ナルトヲ問ハス之ヲ覽覺スルコトヲ許サス構、一三

訴訟書類閲覽ノ申立(抄、贄本付與)

年何第何號何々事件ノ訴訟記録(閲覽)又ハ證人、鑑定人ノ調書、口頭辯論調書ノ抄本、贄本、付與(被成下度申請仕候也)

年月日

(原告、被告)人氏 名

何裁判所 判事 氏 名 殿

第二節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ二二〇、八四、一九一

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ二二〇、八四、一九一

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ二分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス四八、一九二、二〇〇、二一八、二一一

然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得

第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得 四〇、二〇七、二二八、二六四、四九一、四三三

第二百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ  
 裁判ヲ爲スコトヲ得二〇七、民、五三四、五三七、七〇九―七二三  
 請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ  
 至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲ス  
 可キヲ命スルコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルト  
 キハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲  
 ス可シ二六六、一七二、一九八、五三〇、五三一、七二、八四、六五、一二

第二百三十條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス  
 然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルトキハ裁判  
 所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ

第二百三十一條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セシムル權ナシ 一三  
 〇、一九〇、一九六、二〇九、二一一、二二二、二二六

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ擔負ニ限り申立アラサルモ判決ヲ  
 爲ス可シ然レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ  
 得七二、二四二

第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ニ限り之ヲ爲ス 一〇三、  
 二一六、四三六、四六八、搦、一一九、一二四

第二百三十三條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ  
 言渡ス但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス 一六九、二四五ノ二、憲、五九

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス 闕席判決ノ言渡ハ其主  
 文ヲ作ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得 二三六、二四七、二四八、一〇九、二三〇、一三一

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ

又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ二四五ノ二

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在庭スルト否トニ拘ハラズ其効力

ヲ有ス<sup>二四五、二二二、二二七、三五一、一六一、二七三、二七四、八四一、八六、七四二、一七四四、</sup>  
<sup>三〇七、二、二三八、二、二五五、四〇〇、四三七、四六六、四七七、四七五、二四二</sup>

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除クノ外相手方ニ判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス

第二百三十六條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ一〇五、二六一

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所 六二、一七八、一八〇

第二 事實及ヒ爭點ノ摘示但摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申

立ヲ表示シテ之ヲ爲ス四三八、二一六、一三〇、三三二

第三 裁判ノ理由四三六

第四 判決主文二一一、二二三、三五一、二四四、七二、八一、二三一、五〇一、五〇五、五〇七

第五 裁判所ノ名稱、裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名二三二

判決

府縣市町村番地業族	
原告人	氏
府縣市町村番地業族	
被告人	氏
	名
	名

年(何)第何號何々事件ニ付キ當裁判所ハ判決スル左ノ如シ

主文

原告ノ訴ハ之ヲ却下(又ハ被告ハ原告ノ請求スル金圓ヲ支拂フヘシ)(此判決ハ假ニ執行スルコトヲ得)(又ハ保證ヲ立ツルルルハ假ニ執行スルコトヲ得)訴訟費用ハ(原、被)ノ負擔トス

事實

原告人陳述ノ要旨ハ何々ト云フニアリ甲第何號證ヲ提出セリ  
被告人答辯ノ要旨ハ何々ト云フニ在リ乙第何號證ヲ提出セリ

理由

原告人ハ何々ト主張スルモ何々ナルヲ以テ(被告人ハ何々ト陳述スルモ何々タルヲ以テ)(理由アリ又其主張

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續



ヲ採用スルコトヲ得ス。仍テ主文ノ如ク判決セリ

(假リ執行ニ付テノ理由ヲモ説明ス可シ)

何裁判所民事部

裁判長	判	事	氏	名
	判	事	氏	名
	判	事	氏	名

(注意、法律上代理人アレハ之ヲ表示ス又訴訟代理人ハ表示セサルモ可ナリ又之ヲ表示スルモ違法ニアラス訴訟費用ノ理由ハ之ヲ説明セサルモ違法ニアラス)

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ヲ附記ス

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シア七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付ス可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印ス可シ

一五九

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アラシコトヲ申立ツルコトヲ得其申立アリキルトキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ二五五ノ二、四〇〇ノ一、四三七ノ一、四九八、民印、六、民

判決正本送達ノ申請

年何第何號何々請求事件ニ付キ年月日判決ノ言渡相成候間判決ノ正本原告、被告へ御送達相成度申請仕候也

年月日

(原告、被告)人 氏 名

何裁判所 判事 氏 名殿

第二百三十九條 未タ判決ヲ言渡サヌ又ハ未タ判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得ス二三三、二三七、二三四、二七、一一二 裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認 證ス可シ

第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ 羈束セララル二五五、二六〇、四二二、四四八、二四五ノ二

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 4 方裁判所ノ訴訟手續

第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ判決中ノ違算、書指及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス(三三六、三三六、二四四、二四三)此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得(四六六)

判決變更ノ申請

府縣市町村番地族業  
原告人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被告人 氏 名

右當事者間ノ年何(何)第何號何々事件ニ付キ年月日判決相成年月日正本ヲ領收シタルニ其ノ判決主文中ニ何々トアリ(又ハ證據説明若クハ理由中ニ何々トアリ)右ハ何ノ誤謬ト存候間其ノ點ヲ何々ト更正決定相成度申請仕候也

年月日

(原告、被告)人 氏 名

何裁判所 判事 氏 名殿

第二百四十二條 主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ(三三一)判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササルトキハ遅クトモ判決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス(一六八ノ三)追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限り之ヲ爲ス

追加判決ノ申請

府縣市町村番地族業  
原告人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被告人 氏 名

右當事者間ノ年何(何)第何號何々事件ニ付キ年月日判決相成年月日正本ヲ領收シタルニ(何々)ノ請求ニ對シ其

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

部分ニ付キ判決アリテ他ノ一部分ニ付キテ判決ナシ)又ハ(假執行ノ宣言ヲ要メタルニ其判決ナシ)之レ登  
判決ニ脱漏シタルモノト確信仕候間追加判決ヲ以テ補充被成下度申請仕候也

年月日

(原、被告)人 氏 名

何裁判所 判事 氏 名殿

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ  
若シ正本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ  
二四一、二四二、四〇〇ノ三

(判決ノ原本ノ末尾ニ)

右判決中何々トアルハ何々ノ誤謬ニ付キ何々ト更正ス」又ハ「判決中何々ト判決スヘキヲ脱漏シタルヲ以テ  
「何々ト補充ス」

年月日

何裁判所 判 事 氏 名

(注意、原本ノ末尾ニ付記セサルハ別ニ當事者ヲ表示シ右旨趣ノ更正、又ハ補充ノ決定書ヲ作ル可シ)

第二百四十四條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定力ヲ有ス 四九八、五二五、二〇  
七二〇、八二二、一一〇

第二百四十五條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡スコトヲ要ス

第二百三十三條、第二百三十四條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十  
五條、第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長並ニ受命  
判事又ハ受托判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡ヲ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲ササル裁判長並ニ受命判事又ハ受托判事  
ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ一三六、以下

第三節 闕席判決

第二百四十六條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタ  
ル相手方ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ爲ス二四七、二四八、二五〇、二五二、二五四、一八八

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ闕席判決ヲ以テ其訴ノ却  
下ヲ言渡ス可シ二四六

缺席判決

府縣市町村番地族業  
 原告人 氏 名  
 府縣市町村番地族業  
 被告人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ノ口頭辯論期日年月日時ニ原告ハ合式ノ呼出ヲ受ケナカラ出頭セス被告ハ出頭シテ原告ノ訴ノ却下ノ缺席判決ヲ求ムル旨ノ申立ヲナシタルニ因リ民事訴訟法第二百四十六條第二百四十七條第七十二條一項ニ則リ判決スル如左  
 (又ハ當裁判所ハ職權ヲ以テ審査スルニ原告ハ民事訴訟費用法第十七條第七十二條一項ニ則リ判決スル如左  
 (二條ニ基キ相當印紙ヲ帖付セサルヲ以テ同法第十一條ヲ適用シ原告ノ訴ハ之ヲ無効ト判決云々)

原告ノ訴ハ之ヲ却下ス  
 訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

何裁判所 判 事 氏 名

第二百四十八條 出頭セサル一方カ被告ナルトキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ缺席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲ササルトキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ二四六、

缺席裁判(其他ノ文例)

府縣市町村番地族業  
 原告人 氏 名  
 府縣市町村番地族業  
 被告人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何事件ノ口頭辯論期日年月日時ニ被告ハ出頭セス原告ハ出頭シ被告ニ對シ主文ノ如ク缺席判決ヲ受度旨一定ノ申立ヲナシ其原因トシテ陳述シタル要領ハ(何々ノ請求ヲ爲スト云フニ在リ)當裁判所ハ民事訴訟法第二百四十六條及第二百四十八條ニ依リ原告カ事實上ノ供述ハ被告ノ自白シタルモノト看做シ其請求ヲ至當ナリト認メ判決スル如左  
 被告ハ原告請求ノ金何圓ヲ辨濟ス可シ  
 訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

何裁判所 判 事 氏 名

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 ▼方裁判所ノ訴訟手續 一四五

モ亦第二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ二六、五三二

第二百五十條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス二二三ノ一、二二八、一八八、四九、五〇

第二百五十一條 原告若クハ被告カ本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實、證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用セス 一七三、一一、三四一、三五三ノ五

第二百五十二條 左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス然レトモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得二四六一二五〇

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ 四五ノ一、七〇ノ二、二五九、四一九、四五四、四七八、四八九ノ二  
第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ二〇四、三七五ノ二、二二三、二二二ノ二、二四八、一三六

辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ  
決 定

府縣市町村番地族業  
原告人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被告人 氏 名

右當事者間ノ年(何)第何號何々事件ニ付キ年月日時口頭辯論ノ期日ニ(原、被告人)ハ出頭シ(原、被告人)ハ缺席シタルヨリ其出席シタル(原、被告人)ハ缺席判決ノ申立ヲナシタリ然レトモ(原、被告人)ハ裁判所ノ職權上調査スヘキ事項ニ付キ必用ナル證明ヲナサ、ルヲ以テ當裁判所ハ民事訴訟法第二百五十二條第一ニ因リ決定スル如左

本案缺席判決ノ申立ハ之ヲ却下ス

年 月 日 何裁判所 判 事 氏 名

第二百五十三條 闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサリシ原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ

闕席判決ヲ爲スニ六六ノ二、二四八

本條ノ抗告申立及決定ハ第四五七條、第四六四條ノ文例ニ準ス又欠席判決ハ第二四七條、第二四八條ノ文例ニ準ス

第二百五十四條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席判決ノ申立ニ付テノ辯論

ヲ延期スルコトヲ得一六九

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレサリシトキ一五九、一九四、三七七、四一三、四四〇、四九六、

一六一、一五一、八三

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルトキ一七四、一六一

出頭セサリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十五條 闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ツル

コトヲ得一七七ノ二、二六三、六九八

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マル

一七〇、一六八ノ二、一八八、一七四

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲スコキトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコキトキハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之ヲ定ム此決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得一五二、一五六、一六八ノ三、一七〇

第二百五十六條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

二五七、二五八、二六〇

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決ノ表示

第二 其判決ニ對スル障故ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ掲ク可

欠席判決ニ對スル故障ノ申立

府縣市町村番地族業  
 原告人 氏 名  
 府縣市町村番地族業  
 被告人 氏 名

欠席判決ノ表

年何第何號何々事件ニ付キ年月日何裁判所ニ於テ何々トノ欠席判決ヲ受ケタリ

故障ノ申立ノ旨趣

本案ノ口頭辯論期日呼出ハ年月日ニシテ其送達ハ年月日ナレハ口頭辯論期日ニ間ニ合ハサルヲ以テ欠席シタ  
 リ然ルニ之ニ對シ欠席判決ヲナシタルハ不當ナルニ因リ故障ノ申立仕候間本故障ヲ受理シ訴訟ヲ欠席前ノ程  
 度ニ御復シ相成度及要求候也

年月日

(原、被告)人 名 氏

何裁判所 判事 氏 名殿

第二百五十七條 判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期

間ノ經過後ニ起シタル故障ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ一七七、二六三、  
二五五ノ二

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得四六六

(故障申立書ノ末尾ニ)

右故障ノ申立ハ何々(判然不許、不適式、經過期間)ニ付キ却下ス

年月日

何裁判所 判事 氏 名

(注意、故障申立ノ却下ニ對スル抗告ハ第二五三條ノ例ニ準ス)

第二百五十八條 前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故

障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ二五六、二六〇、二六一

第二百五十九條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若

クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立タルヤ否ヤヲ調査ス可シ二五七、二二七、四一〇  
二四五四

若シ此ノ要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ不適法トシテ棄却ス三九六、四三二

本條ノ棄却ノ判決ハ第二三六條ノ文例ニ準スヘシ

第二百六十條

故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ闕席前ノ程度ニ復ス四九八、五一〇、五〇〇、五一一

第二百六十一條

新辯論ニ基キ爲ス可キ判決ハ闕席判決ト符合スルトキハ闕席判決ヲ維持スルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

本條ノ判決ハ第二三六條ノ文例ニ準ス但シ主文ヲ左ノ如クニ記ス可シ

何々ノ欲席判決ヲ維持ス(又ハ欠席判決ヲ廢棄ス原、被告ハ何々トス)

第二百六十二條

法律ニ從ヒ闕席判決ヲ爲シタルトキ闕席ニ因リテ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限り故障ノ爲メ闕席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其闕席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十三條

故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルトキハ第二百五十二條及ヒ第二百五十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新闕席判決ヲ言渡ス二五〇、五〇一、一七四、三九八、

四五

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

本條ノ新欠席判決ノ文例ハ第二四七條第二四八條ノ文例ニ準ス可シ

第二百六十四條

故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス三九九、

第二百六十五條

本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定ヲ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス二四六、二六四、二二六、二二八、二〇一、二四〇、

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキハ其闕席訴訟手續及ヒ闕席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス二二七、二五二、

本條ノ反訴、數額、中間ノ欠席判決モ亦前條ノ例ニ準スヘシ

第四節

計算事件、財生分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條

計算ノ當否、財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目錄ニ對シ許多ノ争アル請求ノ生シ又ハ許多ノ争アル異議ノ生シ



タルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルコトヲ得二〇八、

二六七

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス八、一六二、二四

五三三、一六九、二二〇

本條ノ決定ハ口頭ニテ言渡シ調書ニ記載スルヲ以テ別ニ文例ヲ示サス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ二七二、二九、

三三

- 第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ二一九
- 第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ争フヤ又ハ之ヲ争ハサルヤ
- 第三 争ト爲リタル請求及ヒ争ト爲リタル攻撃、防禦ノ方法ニ付テハ其實質上ノ

關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法並ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立二〇五、二二三、二一四、

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ決判又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルトキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ一八八

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ自白シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモトノス二七二、二七四

第一百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ

通知ス可シ一五九、二六八、二六九、一一二

第二百七十一條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シニ

七二、ノ二、二二四、二二四ノ一

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ争ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス其他ニ付テハ申立ニ因リテ闕席判決ヲ爲可スシ二六九、二二九、二四六、一四四、八二六五、二七二ノ二、一八八、

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又ハ證書ニ付キ陳述ヲ爲サ

ス又ハ之ヲ拒ミタルトキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得二六八、一七一、一七三、三四一、四二五、四

一七

請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知リタルコトヲ説明スルトキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得二〇九、二一〇

第五節 證據調ノ總則

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ通例トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得二九六、三二八、三二二、三三一、三四八、三五八、二七六、二九七、四三三、

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

本條ノ決定ハ第二六七條ノ例ニ準ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム

二二三、三四六、二二〇、二二四ノ二、二八五、二四五ノ二、一一七

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サシテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ二九二、三三二、二九六ノ一、三一八、三三一、三四八、三五八ノ二、二七六、一七、二二三ノ一

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ障礙アルトキハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定

實例民事訴訟法 第一審之訴訟手續 地方裁判所之訴訟手續

ム可シ此期間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滯セシメサル限リハ其證據方法ヲ用キル  
コトヲ得<sup>一七三、三四二、一七</sup>  
<sup>〇一七三、四一五</sup>

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ<sup>二八八、二九二</sup>  
<sup>三三二</sup>

第一 證ス可キ係爭事實ノ表示

第二 證據方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キトキハ其表示

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ被告ノ表示

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在リテ新ナル辯論ニ基クト

キニ限リ之ヲ申立ツルコトヲ得<sup>二二四</sup>

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十八條 受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長證據決定言渡ノ

際受命判事ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルトキハ受命判事之

ヲ定ム<sup>一六一、二八〇、二八六</sup>

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長史ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キキトハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス

可シ<sup>二八一、二七三ノ二、三一</sup>

據證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記  
ハ之ヲ受領シタルコトヲ當事者ニ通知ス可シ<sup>三三四ノ一、二八七ノ二</sup>

證據囑託調書

年何第何號何々事件ニ付キ左ノ證據調へ相成度及囑託候也

住 所

氏 名

右氏名ナ證人トシテ訊問スル事項(又ハ何々ノ檢證スル事項)

一何々

右訊問(檢證)及囑託候也

年 月 日

何裁判所 判 事 氏 名

何區裁判所 判 事 氏 名

實例民事訴訟法 第一審之訴訟手續 地方裁判所訴訟之手續 一五九

第二百八十條 受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知ス可シ二七八

第二百八十一條 外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ第五百二十二條及ヒ第五百五十五條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十二條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得此囑託ヲ爲シタルトキハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ二七八、二七九

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ争ヲ生シ其争ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルコトヲ得ス且其判事之ヲ裁判スル權ナキトキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス二七八、一七二、三一九ノ一、三二二、三〇一

第二百八十四條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルトキハ事件ノ程度

ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ五二五ノ二、一七三、四二五、

原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲ニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサルトキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ説明スル時ニ限り判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス一七三、三三〇、二八七

第二百八十五條 裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得二七四ノ一、二一七

第二百八十六條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムル必要アルトキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム二七七ノ二、二八四ノ一、一七三、二八四ノ二、一六

第二百八十七條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スル期日ナリトス二八四ノ一、二四六、二四八、

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ命シタルトキハ受訴裁判所ハ證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之テ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限り證據調ヲ許ス一七三、三二一、三三二、九七

納書

一金何圓也

民事豫納金

右年何第何號事件ノ證據調ヘノ費用トシテ豫納仕候也

年月日

(原、被告)人 氏 名

何裁判所 御中

第六節 人證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スル義務アリ二九〇ノ二、二九七、二九八

第二百九十條 官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス二九八、二九一、二八九

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得  
右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ニ通知ス可シ

年何第何號何々事件ニ付キ貴廳官氏名ヲ證人トシテ別紙事項ヲ訊問セントスルニ其事項ハ何人ノ職務上默秘ス可キ義務ニ屬スルモノト思料候條右官氏名ニ右事項ノ訊問ニ答フルモ差支ナキ旨許可ヲ與ヘラレ度及要  
候也

年月日

何裁判所 判事 氏 名

(注意、訊問事項ハ當事者ヨリ提出シタルモノヲ添付スヘシ)

官 宛

實例民事訴訟法 第一審之訴訟手續 地方裁判所之訴訟手續

年月日要求有之候年(何)第何號何何事件ニ付キ官氏名ヲ訊問スル事項ハ國家ノ安寧ヲ害スル恐レアルモノト認メサルニ付キ官氏名ヲ訊問相成候事差支無之候條隨意御訊問相成度候也

年月日

官氏名

何裁判所 判事氏 名殿

通知書

證人官氏名

年(何)第何號何々事件ノ證人訊問ノ義別紙ノ通り許可相成候條及通知候也

年月日

何裁判所 書記氏名

〔注意、證人訊問ニ關シ勅許ヲ得ル場合ニハ其掛官ヨリ所長、院長ニ申出所長又ハ院長ハ司法大臣ニ申立全大臣ヨリ執奏スルモノトス〕

第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス二二三、二七六、二七四、二八五

證人訊問ノ申擧

府縣市町村番地族業 證人氏名

年(何)第何號何事件ニ付キ前記氏名ヲ證人トシ左ノ事項訊問相成度申請候也

一何々

右事項ノ證言ヲ得ル爲メ期日ヲ定メ御呼出相成度候也

年月日

(原告)(被告)人氏名

何裁判所 判事氏名殿

(注意、口頭辯論ノトキハ證人喚問ヲ右書面ニ基キ申立ヲナス又ハ口頭ニテ申立タル后訊問事項ノミヲ提出スルモ可ナリ)

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス 二九四、二九七、二九八、二七六、一六一、二九

第一 證人及ヒ當事者ノ表示

實例民事訴訟法 第一審之訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續 一六五

- 第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示
- 第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時
- 第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨二九四
- 第五 裁判所ノ名稱

訊問事項

住 所  
證 人 氏 名

原告氏名被告氏、間ノ年何第何號何事件ト證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問スヘキ事項如左  
一何々

(注意、呼出狀ニ右事項書ヲ添付シテ送達スヘキモノトス呼出狀ニ民訴、第二九二條ノ一號、三號乃至五號ノ記載アリ)

第二百九十三條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ヲ證人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ呼出受ケタル者ノ闕勤ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトハ其旨ヲ裁判所ニ通

知シ且他ノ期日ヲ定ムル求ヲ爲ス義務アリ一五五、二七九、一一、一三九

通知書

年何第何號何事件ニ付キ當聯隊大、中、隊ニ屬スル士、卒氏名ヲ證人トシテ年、月、日、時、喚問相成候處全日ハ軍務上何々ニテ欠勤ヲ許可シ能ハサルニ因リ期日ナ何日ヨリ何日マテノ間ニ指定相成度此段及通知候也

年 月 日

師團、聯隊、大、中、隊長 氏 名

何裁判所 判事 氏 名殿

第二百九十四條 合式ニ呼出レタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ貳拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ<sup>二九三、二九二、二九六、一三六、二九五、一六三、一、三〇二、三二八、三一九、刑五、二七</sup>  
證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得<sup>三一九、執三ノ一、執手、一三、</sup>

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

實例民事訴訟法 第一審之訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

豫備、後備ノ軍籍ノ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所  
又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シニ九三

決定

府縣市町村番地族業

證人 氏 名

原告人氏名被告人氏名間ノ年何第何號何々事件ニ付キ證人ハ(不參シタルニ)又ハ再度出頭セサルニ(因リ決  
定スル如左

理由

證人氏名ヲ(訴訟費用金何圓ノ賠償)(又ハ金何圓ノ罰金)ニ處ス(又ハ何裁判所民事法廷ニ勾引ス)

證人ハ當廳年何第何號何事件ニテ年月日證人トシテ出廷スヘキ旨ノ合式ノ呼出ヲ受ケナカラ何等ノ理由ナク  
出廷セサルニ因リ云々、、、民訴第二百九拾四條第一項又ハ第二項ニ因リ主文ノ如ク決定ス

年月日

何裁判所 判事 氏 名

(注意、證人カ罰金ヲ完納セサル時ハ刑法二七ニ因リ換刑處分ヲ爲スヘシ、其執行ハ檢事其任ニ當ル、又  
勾引ハ執達吏之ヲ爲スヘシ、右ノ決定ニ對シ、證人ハ抗告ヲ爲スヘシ其文例ハ第四五七條、第四八四條

ニ準スヘシ

第二百九十五條 證人其出頭サリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰  
金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ六九、三一九ノ一、

證人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

不參届

年何第何號何々事件ニテ年月日時證人トシテ喚問相成候處別紙診斷書ノ如ク(又ハ事故)病氣ニテ出頭致兼  
候間及御届候也

年月日

證人 氏 名

何裁判所 判事 氏 名

決定取消申請

年何第何號何々事件ニ付キ年月日、時、證人トシテ喚問(再喚問)相成候處何々事故ニテ不參仕候ニ決定ノ  
途達ニ因リハ罰金ノ御處分相成候モ前願ノ如キ(別紙何號證ノ如ク)事實ニテ不得止不參仕候議ニ付キ何卒

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續



御取調への上御決定御取消シ相成度申請仕候也

付屬書類

一何々

年月日

證人 氏名

決定

府縣市町村番地族業

證人 氏名

年(何)第何號何々事件ニ付キ決定シタル(罰金)(賠償)ノ處分ニ付キ證人氏名ヨリ何々トノ理由ヲ以テ取消ノ申立チナセリ當裁判所ハ其申請ヲ(至當ト認メ)(理由ナシトシ)決定スル如左  
年月日氏名ニ對シ言渡シタル何々ノ決定ハ之ヲ取消ス(又ハ本申請ハ之ヲ却下ス)

年月日

何裁判所 判事 氏名

(注意、右申請ノ却下ニ對シ抗告ヲ爲ス文例ハ第四五六條第四六四條ノ文例ニ準ス可シ)

第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス

二九八

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其滞在地ニ於テ之ヲ訊問ス

問ス

第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得二九九

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ又同シ三一

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者三一〇

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ仕フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ク可シ

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者カ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ

關スルトキニ九〇、二九九

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲

メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキニ

九九

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事

上ノ訴追ヲ招ク恐アルトキ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害

ヲ生セシム可キトキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ祕密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルコト能ハサル

トキ

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於

テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得スニ九七、二九八

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事項

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行爲ノ成立及ヒ旨趣五三七

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行

爲三六〇、一三六四

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其默秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ

拒ムコトヲ得スニ九〇

第二百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其

拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シニ九七、二九八、二九〇、一三五、

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルトキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

證言拒絕ノ申立(數通ヲ提出ス可シ)

府縣市町村番地族業

氏

名

原告人氏名ヨリ被告人氏名間ノ年何第何號事件ニ付キ證人トシテ御呼出相成候處本件訴訟ハ民訴第二百九拾七條若クハ第二百九十八條何號ニ該當スル關係有之ニ付キ證言拒絕仕候也

年月日

氏

名

何裁判所 判事 氏 名殿

(注意、口頭辯論ノ際ナレハ口頭ニテ拒絕スルコトヲ得ヘシ其時ハ書記拒絕ノ調書ヲ作ルヘシ又書記ハ證言拒絕ノ書面ヲ申立人ニ(舉證者)通知ノ爲メ送達ス可シ)

第三百一條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又

ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス三一九ノ二、三〇〇ノ一、三二〇、二九八

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス四ノ

六ノ二、三〇一

決定

府縣市町村番地族業

申請人 氏 名

府縣市町村番地族業

被申請人 氏 名

申立人ノ證言拒絕ノ申立ニ付キ決定スル如左

申立人ハ證言ヲ拒絕スルコトヲ得ス(又ハ拒絕スルコトヲ得)

理由

申立人證言拒絕ノ要旨ハ何々(二九七、二九八、ノ各號ニ抵觸スルコト)ト云ヒ被申請人ハ(何々タルハ)其拒絕ヲ以テ不當ナリト云フ仍テ之ヲ審按スルニ(申立人ノ陳述ハ何々タルヲ以テ失當ナリ)又ハ(被申請人ノ陳述ハ何々タルニ因リ失當ナリ)仍テ主文ノ如ク決定ス

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

年月日

何裁判所 判事 氏 名

(注意官吏方二九八、ノ一號ニ因リ證言ヲ拒絕スルトキハ第二九〇條ノ文例ニ因リ所屬官廳ノ許可ヲ要ム可シ又抗告ハ四五六、四六四ノ文例ニ準ス可シ)

第三百二條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス二九四、三〇一、三一九、證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス二九〇ノ三

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス二九四ノ四

本條ノ罰金言渡決定ハ第二九四條ノ文例ニ準ス可シ

第三百三條 原告若クハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二九十七條第一號乃至第

三號ノ關係アルトキハ其證人忌避スルコトヲ得一九七、三〇四、三〇五

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲ス可シ此期限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ説明スルトキニ限り其證人ヲ忌避スルコトヲ得三〇三、二九七、三〇五

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得二三五  
忌避ノ原因ハ之ヲ説明ス可シ二二〇

證人忌避ノ申請

證人 氏 名

原告人氏名被告入氏名間ノ何裁判所年(何號何々事件ニ付キ(原、被告)ノ申立ニ因リ前記氏名ヲ證人トシテ御喚問決定相成候處證人氏名ハ舉證者ト何々關係(二九七、一號乃至三號)ヨリ證人トシテ御取調ヘ有之候 甚々危險ニ付キ民訴第三百二條ニ因リ忌避相成度此段申請仕候也

年月日

(原、被告)人 氏 名

何裁判所 判事 氏 名殿

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得<sup>三〇三、</sup>  
 忌避ノ原因アリト宣言スルニ決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス忌避ノ原因ナシ  
 ト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得<sup>四六六</sup>

決定

府縣市町村番地族業  
 申請人 氏 名

年何第何號何々事件ニ付キ(原、被告)人ヨリ申請シタル證人氏名ニ對シ(原、被告)人ヨリ忌避ノ申請ヲナ  
 シタルニ因リ決定スル如左

本按申請ハ之ヲ棄却ス(又ハ忌避ノ原因アルヲ以テ證人氏名ヲ忌避ス)

理由

申請人ハ云々ト陳スルモ何々ナレハ忌避ノ原因ナキヲ以テ申請ヲ却下スルヲ相當トシ(又ハ何々トノ申請ハ  
 理由アルヲ以テ忌避ノ原因アリトス)仍テ主文ノ如ク決定ス

年月日

何裁判所 判 事 氏 名

(注意、忌避ノ原因ナシトノ決定ニハ第四五七條第四六四條ノ文例ニ因リ抗告ノ申立及決定ヲ爲スコ  
 シ)

第三百六條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコト  
 ヲ判然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ<sup>三〇七、三〇八、三〇九、三一一、二  
 九〇、三一〇</sup>  
 然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スル  
 トキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事  
 ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ<sup>三〇六、三〇九、二九八</sup>  
 又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又  
 何事ヲモ附加セザリシ旨ヲ誓ヲ宣フ可シ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ<sup>三〇  
 六、三〇七、刑、二二三</sup>

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス三一九、

本條ノ宣誓ヲ拒ム申請ハ第三〇〇條、其當否ノ決定ハ第三〇一條、又之ヲ處罰スルハ第三〇二條、第二九四

條ノ各文例ニ準ス可シ

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得<sup>三〇六、</sup><sub>三〇九、</sub>

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セサル者刑二二

第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ

拒絕スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ場

合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證言ヲ爲ス可キコトヲ申立テラレタ

ルトキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

刑訴、一二七

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムコトヲ得

第三百十二條 證人訊問ハ證人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始

マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ

關係ニ付テノ問ヲ爲ス可シ二八九

第三百十三條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ牽連シテ供述セシム可シ二

八九、二七六、二九二

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知リ得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場

合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條 證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用キルコトヲ得ス但算

數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用キルコトヲ得二一〇ノ三、三六、二

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟法手續

第三百十五條 賠償判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ當事者ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲ニ其必要ナリトスル問ヲ發センコトヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得

二二四、二二三、三二二、三二四、三一九ノ三、

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

二七六、二九〇、三二〇、一三〇、一三五

第三百十六條 調査ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セスシテ

訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ

一三〇、三〇七、三二〇、

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

第一 證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二 證人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三 證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩議ニ涉ルトキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

第五 此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命

シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

二七三ノ一、二九六

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人ヲ訊問スル必要ナルトキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付

キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條、第二百九十五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケ

タル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒

ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ

付キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所ニ屬ス

二九四、二九五、三〇二、三〇九、三一三ノ二、三一五ノ二三

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

訊問拒否ニ對スル申請

何裁判所年(何)幾何號何々事件ニ付キ證人氏名ノ訊問ヲ何區裁判所へ囑託相成年月日證人ノ訊問ヲナシタルニ因リ申立人ヨリ何々事項ノ訊問ヲ受託判事ニ申立タルニ全判事ハ其訊問ヲ必用ナシトシテ拒否シタリ然レトモ其事項タル本件ニ重大ノ關係(何々)アルヲ以テ之ヲ拒否シタルハ不當ナルニ付キ申請人ノ訊問申立ハ相當ナリトシ證人氏名ニ對シ其事項訊問相成候様御決定相成度申請仕候也

年月日

申請人 氏 名

決定

年(何)第何號何々事件ニ付キ證人氏名ノ訊問ニ際シ受託判事カ申請人ヨリノ訊問事項ヲ拒否シタルニ因リ其當否決定ノ由立ヲナセリ仍テ當裁判所ハ決定スル如左

本件ノ申立ハ之ヲ却下ス(又ハ其申立ハ相當ニ付キ證人氏名ニ何々ノ事項ヲ訊問ス可シ)

理由

何々ノ理由ニ因リ云々……………仍テ主文ノ如ク決定ス

年月日

何裁判所 判 事 氏 名

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受託裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得  
三〇〇・三〇一・三〇九・三一五ノ三  
證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得三一七

第三百二十條 證人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限り之ヲ拋棄スルコトヲ得四一五・二七六・二八九

第三百二十一條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得二八九、民費、一〇、一三

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得  
舉證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

證人旅費、日當ノ請求書

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續



一金何圓 日當  
一金何圓 旅費

右年何第何號何事件ノ證人トシテ出頭シタル日當、旅費辯濟相成度請求仕候也

年月日

證人 氏 名

何裁判所 判事 氏 名殿

第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テハ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ人證ニ

付テノ規定ヲ準用ス二八九、三二二、三三三、三三三、三七二、  
六ノ二、三五三ノ四、三五八、三八八

鑑定ノ申請

原告人氏名被告人氏名間ノ年何第何號何々事件ニ付キ鑑定ヲ命セラルヘキ事項如左

一 甲第何號證ノ何々ト第何號證ト同一ナルヤ

一 請求ノ何々物件ハ腐敗シタルヤ其度合如何

右事項ニ付キ鑑定人ヲ命シ鑑定セシメラシ度申請仕候也

年月日

(原、被告)人 氏 名

〔注意、口頭辯論ノ際、口頭ニテ申立ルコトヲ得其時ハ事項ヲ調査ニ記ス又申請アルトキハ即時口頭ニテ  
決定シ其氏名ヲ期日ニ呼出シ鑑定ヲ命ス〕三二四

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ爲ス二九一、一三五

第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其

裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ

他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得三三一

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス可キ旨ヲ當事者ニ催告ス

ルコトヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從フ可

シ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲ス可キ選定ヲ一定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有ス

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

ル本邦人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第二百二十六條 左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲ス義務アリ二八九

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ任命セラレタル者

第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術技藝若クハ職業ニ常ニ従事スル者又ハ學術、技藝若クハ職業ニ従事スル爲ニ公ニ任命セラレ若クハ授權セラレタル者

右ノ外鑑定ヲ爲スヘキ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タル義務ナキトキト雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ

第二百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ二九七、二九九、三〇〇、三〇一、三一九ノ二

官吏、公吏ハ其所屬廳ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス二九八、三〇三、三〇四、三二二

本條ノ鑑定拒絕ノ申請及其當否ノ裁判ノ文例ハ第三〇〇條第三〇一條ノ文例ニ準ス可シ  
第二百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テ

ハ其者ニ對シ此カ爲ニ生シクル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス三二六、二九四、三〇二、三二二、三一九ノ一

本條ノ鑑定人不參ノ處分ハ第二九四條ノ文例ニ又其不參屆、處分取消ノ申立及決定ハ第二九五條ノ文例ニ準ス可シ

第二百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フ可シ三一〇

第二百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ム可シ三〇六、三一一、三一八、三二二

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ二九二、二九三、三〇六、三一三、二九三、三一八

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナルトキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號並ニ第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス三一九ノ一、三三二

第三百三十二條 鑑定人ハ日常、旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準用ス民費二一三

本條ノ日常、旅費請求ノ文例ハ第三二一條ノ文例ニ準ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其實驗アル者ノ訊問ニ因リテ確定ス可キトキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス二八九―三三二

本條ノ必用ナル文例ハ證人ニ關スル各文例ニ準ス可シ

(注意、鑑定人、忌避ノ文例ハ證人ノ全文例ニ準ス可シ又其他茲ニ掲ケサル證人ニ關スル各文例ハ鑑定人

ニモ亦之ヲ準用ス)

### 第八節 書證

第三百二十四條 書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス三五四、三四八、一〇七、二七四ノ二、二七六(一)五、一六、民四六七、五一五  
九八八、民施四一八、商二五―二八

第三百二十五條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命センコトヲ申立テテ之ヲ爲ス可シ三三八、三三九―三四一、三四二―三四六

第三百二十六條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スル義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルトキ民四六六、四七四、五五五

第二 證書カ其趣旨ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

第三百二十七條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニシテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタ

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所訴訟手續法

ルモノヲ提出スル義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルトキト雖モ亦同シ<sup>二〇七、二二三</sup>

第三百三十八條 證書ノ提出ヲ命センコトノ申立ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ<sup>二三五、二二三</sup>

- 第一 證書ノ表示
- 第二 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ表示
- 第三 證書ノ趣旨
- 第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情
- 第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因ノ表示<sup>三三六、三三七</sup>

證書提出ノ申請

原告人被告人氏名間ノ年(何)第何號何々事件ニ付キ(原告者クハ被告ヲシテ)左ノ證書ヲ提出スヘキコトヲ申請ス

- 一 (原、被告)ノ所持スル年月日氏名ヨリ氏名ニ宛タル何々ノ書。
- 二 右證書ハ本件ノ何々ヲ證スル書面ナリ
- 三 其證書ハ何々ト云フ旨趣ヲ記載シタルモノナリ

四 右證書ハ本件成立ノトキ(原、被告)ノ爲メ後日本件ニ對シ紛訟ヲ妨止スル爲メ(原、被告)ノ手ニ存セシメタルモノナリ

五 右證書ハ本件ノ成立ヲ證スヘキ爲メ(原、被告)ノ手ニ存セシメタルモノナレハ本件ニ關シテハ(原、被告)ハ之ヲ提出スル義務アルモノトス

右事項ノ如クナルヲ以テ證書提出ヲ要メタル次第ナレハ速ニ右證書提出御命令アラシコトヲ申請仕候也

年月日

(原、被告)人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、此申立ハ口頭辯論ノトキ演述セシム然ル時ハ第三三九條ニ因リ相手方ニ證書ヲ提出スヘキ旨ノ證據決定ヲ爲ス其決定ハ口頭ニテ言渡ス可シ而シテ書記ハ之ニ付テノ調書ヲ作ル(一三〇、一三五))

第三百三十九條 裁判所ハ證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且申立ヲ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存スルコトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セザルトキハ證據決定ヲ以テ證書ノ提出ヲ命ス<sup>三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九</sup>

第三百四十條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルトキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ窄鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヤヲ窄鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒテ相手方本人ヲ訊問ス可シ三六一—三六四、

相手方カ官廳ナルトキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルコトヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換フ裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム可シ三四一

第三百四十一條 證書ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セスト申立テサル相手方カ其證書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハス又ハ相手方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルトキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルコトノ明確ナルトキハ舉證者ノ差出シタル證書ノ謄本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出ササルトキハ裁判

所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得三三九

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ差出ササルトキハ相手方タル官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ生ス三三九

第三百四十二條 舉證者其使用セントスル證書カ第三者ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル爲メ期間ヲ定メンコトヲ申立テテ之ヲ爲ス三三四、三三五、三四四、三四五ノ一

第三百四十三條 第三者ハ舉證書ノ相手方ニ於ケルト同一ナル理由ニ因リ證書ヲ提出スル義務アリ然レトモ強テ證書ヲ提出セシムルコトハ訴ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得三三六、三三七、七三〇

本條ノ訴ニ付テノ文例ハ第一九〇條、第一九九條ノ其判決文例ハ二三六條ノ文例ニ準ス可シ

第三百四十四條 第三百四十二條ニ從ヒ申立ヲ爲スニハ第三百三十八條第一號乃至第

三號及ヒ第五號ノ要件ヲ履ミ且證書カ第三者ノ手ニ存スルコトヲ疏明ス可シ

本條ノ申立ノ文例ハ第三三八條ノ文例ニ準スヘ(三四二)

第三百四十五條 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スルトキハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ定ム可シ一七二ノ二、二七五、四一五

第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタルトキ又ハ舉證者カ訴ノ提起、訴訟ノ繼續又ハ強制執行ヲ遲延シタルトキハ相手方ハ前項ノ期間ノ満了前ト雖モ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ツルコトヲ得三四三、一〇三

第三百四十六條 舉證者其使用セントスル證書カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ證書ノ送付ヲ官廳又ハ公吏ニ囑託セラレンコトヲ申立テテ之ヲ爲ス三三八、三四四、三四五ノ一、二七九、三四八

此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ助力ナクシテ取寄スルコトヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス三四四、三四二

官廳又ハ公吏カ第三百三十六條ノ規定ニ基キ證書ヲ提出スル義務アル場合ニ於テ其送付ヲ拒ムトキハ第三百四十二條乃至第三百四十五條ノ規定ヲ適用ス三四二―三四五、三三六

何々書類送付囑託書

當廳年何第何號何々事件ニ付キ(原、被)告人ヨリ貴廳ノ保存ニ係ル何々ノ書類(年月日付何氏名間ノ何ト題スル書面)本訴ノ立證ニ必用有之ニ付キ貴廳ヨリ取寄セ方申立相成候間右書類御保存有之候得ハ至急御送付相成度及囑託候也

年月日

何裁判所 判事 氏名

官廳宛

(注意、本條三項ニ因リ訴ヲ提起スル場合ニハ第三四三條ノ例ニ準スヘシ)

第三百四十七條 證據決定ヲ爲シタル後第三百四十二條及ヒ第三百四十六條ノ規定ニ從ヒ書證ヲ申出テタル場合ニ於テ登書取寄ノ手續ノ爲ニ訴訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ルヘク且裁判所ニ於テ原告若クハ被告カ訴訟ヲ遲延スル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

ニ因リ書證ヲ早ク申出テサリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下スルコトヲ得三三四、三三五、三四二、三四六

第三百四十八條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障礙アルトキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得三三四(二七二ノ一)商二五―二八

受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其謄本ヲ調書ニ添附シ又證書ノ一分ノミ必要ナルトキハ第七七條第二項ノ規定ニ從ヒテ作りタル抄本ヲ之ニ添附ス可シ 三三三、一〇七ノ二(三五一、一三五)

第三百四十九條 公正證書ハ正本又ハ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テ之ヲ提出スルコトヲ得然レトモ裁判所ハ舉證者ニ正本ノ提出ヲ命スルコトヲ得三九七、一三〇

私署證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出ス可シ若シ當事者カ未タ提出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其證書ノ效力又ハ解釋ニ付テノミ爭ヲ爲ストキハ謄本ヲ提出スルヲ以テ

足ル然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ舉證者ニ原本ノ提出ヲ命スルコトヲ得一三〇

提出シタル謄本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ心證ヲ以テ謄本ニ如何ナル證據力ヲ付ス可キヤヲ裁判ス一三〇

第三百五十條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限り此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得三二〇、二一五、二一六

第三百五十一條 公正證書又ハ檢眞ヲ經タル私署證書ヲ偽造若クハ變造ナリト主張スル者ハ其證書ノ眞否ヲ確定センコトノ申立ヲ爲ス可シ三五二、三五三、一三五

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ 四二、三五四、三五三ノ二、三五五

本條ノ中間判決ノ文例ハ第二三六條ノ文例ニ準ス可シ

(注意、本條ノ偽造ノ申立ハ口頭辯論ノトキ口頭ニテ申立ルモノナレハ別ニ文例ヲ示サス又申立アレハ書

記ハ之ニ付テノ調書ヲ作ル)

第三百五十二條 私署證書ノ眞否ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ舉證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スコトヲ得三五三

第三百五十三條 私署證書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因リテ之ヲ爲ス三五二二八九一三六四

證書ノ眞否ヲ證セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲ニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ一七〇ノ二

眞正ナリト自白又ハ證明シタル適當ノ對照書類ナキトキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルコトヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ

裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス二一七

原告若クハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提出セザルトキ又ハ對照ス

可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辯解ヲ爲サスシテ之ニ從ハザルトキ又ハ書様ヲ變シテ手記シタルトキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做スコトヲ得

私證書檢眞ノ申立

原告人氏名被告人氏名間ノ年何第何號何々事件ニ付キ檢眞ヲ要ムル事項如左

一(原、被)告人ヨリ提出ノ證書ハ其筆蹟、印影ニ於テ疑ハシキ点アルヲ以テ他ノ適當ノ筆蹟印影トナ對照シ

テ檢眞ヲ要ム

右申請仕候也

年月日

(原、被)告人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、檢眞ノ申立ハ口頭辯論ノトキ口頭ニテ申立ルモ可ナリ然ルトキハ書記之カ調書ヲ作ル)

第三百五十四條 提出シタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其謄本ヲ記錄ニ留メテ之ヲ還付ス可シ

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續



然レトモ證書ノ偽造又ハ變造ナリト争フトキハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルコトヲ得ス三四九、四二

第三百五十五條 公正證書ノ偽造若クハ變造ナルコトヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若クハ被告ニ惡意若クハ重過失ノ責アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

又私署證書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ争フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス二九四、三〇二

本條ノ過料ノ言渡ノ文例ハ第二九四條ノ文例ニ準ス可シ

第三百五十六條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ事跡ノ紀念又ハ權利ノ證徴ノ爲メ作リタル割付、界標等ノ如キモノニモ之ヲ準用ス

本條ノ事跡ノ紀念、割付、界標ノ證徴ニ付テハ書證ニ關スル各文例ヲ準用ス可シ

第九節 檢證

第三百五十七條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

三三六、三三七、一七、一三五

檢證ノ申請

原告氏名被告氏名間ノ年何第何號何事件ニ付キ左ノ事項ニ關シ檢證ノ申出ヲ爲ス

一 何々ノ物件ハ何々ナルヤ又ハ何々ノ經界ハ何々ヲ以テ標示トスルヤ

一 本訴ニ於テ(原告)(被告)ハ何々ノ物件ヲ何々ト主張スルモ何々タルコト又ハ何々ノ標示ヲ以テ經界トスルニ何々ヲ以テ標示ト争フ云々

右何々ニ付キ檢證相成度申請仕候也

年月日

(原告)人  
(被告)人

氏

名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、本條ノ檢證ノ申出モ口頭辯論ノ際口頭ニテ申出ス可シ然時ハ書記ニ於テ調書ヲ作ル可シ)

第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命スルコトヲ得三八、三四八

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコ

實例民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟手續

トヲ得三二四、三三一

第三百五十九條 檢證ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添附ス可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ一三〇

若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ一〇五ノ一

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ證ス可キ事實ノ真否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得一三〇、一三五

當事者本人訊問ノ申立

年何第何號何々事件ニ付キ訴訟代理人ノ陳述ニテハ何々事項ノ證明ヲ爲シ能ハサルニ因リ如斯ニテハ十分ナ

ル心證ヲ得サルヲ以テ當事者本人ヲ御訊問被成下度申請仕候也

年月日

原告人 氏 名  
被告人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、右ノ申請ハ口頭辯論ノ際ナレハ口頭ニテ申立ヲナシ書記ヲシテ調書ヲ作ラシムルニテ足ル又之ヲ許否スル決定モ口頭ニテ言渡シ書記ヲシテ其決定ヲ調書ニ記載セシム)

第三百六十一條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定言渡ノ際在廷スルトキハ直チニ其訊問ヲ爲スヲ以テ通例トス二九二

第三百六十二條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用キルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用キルコトヲ得三一四

第三百六十三條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因リテ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

第三百六十四條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キヤ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訊問ス可キヤ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス四三

法律上代理人數人アルトキハ其一人ヲ訊問ス可キヤ又ハ數人ヲ訊問ス可キヤモ亦前項ニ同シ民九〇〇、三一六、八八四、九二二、九二九

第十一節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ證人若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申立ツルコトヲ得三七二、二八九、三二二、三五七  
第三百六十六條 訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ切迫ナル危険ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢證ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得三七三  
訴訟ノ未タ繫屬セサルトハキ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ要ス三

七三

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百六十七條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス三六五、三六六、一三五

- 第一 相手方ノ表示三七二
- 第二 證據調ヲ爲ス可キ事實ノ表示
- 第三 證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ス可キトキハ其表示三二三、三三四、
- 第四 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル理由此理由ハ之ヲ説明ス可シ

證據保全ノ申請

府縣市町村番地族業  
原告人 氏 名

府縣市町村番地族業  
被告人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ニ付キ左ノ事項ニ關シ證據保全ノ申請ヲナス

- 一 何々物件ノ破損ニ付キ損害ノ情況(何々)タルコト
  - 一 證人ナシテ見分シタル破損ノ證言又ハ破損ヲ鑑定セシムルコト
  - 一 證人トナル人病氣危篤ナルコト又ハ其物件ノ消滅ニ歸スル憂アルコト(何々ニ因テ疏明ス)
- 右ノ理由ニ因リ(證人ノ闕間(鑑定人ノ鑑定ニ)因リ證據保全被成下度申請仕候也

年月日

原告人	氏	名
被告	氏	名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、口頭辯論ノ際口頭ニテ申立ルトキハ書記カ調査ヲ作ルヘシ其決定ハ口頭ニテ言渡シ書記ヲシテ調書ニ記載セシム)

第三百六十八條 申請ニ付テノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲ス可キ事實及ヒ證據方法殊ニ訊問ス可キ證人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ス可シ此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス三六五―三六七、三七二、三三〇、三六九、二九二、三三二、四五五、二七六、二七七

第三百六十九條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請ノ謄本ヲ送達シテ

其權利防衛ノ爲ニ相手方ヲモ呼出ス可シ三一五、三三〇、三三二

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出スコトヲ得サリシトキト

雖モ證據調ヲ妨クルコト無シ二八四

第三百七十條 證據調ハ本章第六節、第七節及ヒ第九節ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス 二八

九―三三二、三三三―三三三、三五七―三五九、二七三―二八八、三六六

證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ各當事者ハ證據調ノ調書ヲ訴訟ニ於テ使用スル權利アリ

受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ證據調ヲ命シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十一條 證據調ハ第三百六十五條ノ條件ナキトキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得三六五、三六九

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサルトキハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルコトヲ説明スル場合ニ限り其申請ヲ許ス三六五  
 申請ヲ許容シタルトキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ爲ニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得三六九、三七〇

辯護士 氏 名

年何第何號ノ證據保全事件ニ付キ未知ノ相手方ト爲ル可キ臨時代理人ヲ命ス  
 年月日

何裁判所判事 氏 名

(注意、訴狀ハ第一九〇條ノ文例ニ準ス又答辯書ハ第一九九條ノ文例ニ準ス可シ)

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第三百七十三條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル限リハ地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用

ス九ノ二、三六ノ三、六三ノ三、一一二、一一三、一一三ノ二、三七四―三八一、  
 據一一ノ一、一〇四、三七八、三八一、一九〇、一三五、一九五

第三百七十四條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第三百七十五條 起訴アリタルトキハ裁判所書記ハ訴狀ヲ被告ニ送達スル手續ヲ爲ス  
一九〇、一九一、一九三、一九九、一六〇、三七一、一三一、一六一

準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス一〇四、一〇五

第三百七十六條 原告若クハ被告ハ其申立及ヒ事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ヘカラサルモノヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スルコトヲ得二〇四、二五二

第三百七十七條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニ少ナクトモ三日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時間マテニ短縮スルコトヲ得一六五、一九四、四九六ノ三

送達ヲ外國ニ於テ爲可キストキハ事情ニ應シテ時間ヲ定ム可シ一五八

第三百七十八條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲スコトヲ得

此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス一九〇、三七四、二五三二號

第三百七十九條 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ本案ノ辯論前同時ニ提出ス可キ規定ハ裁判所管轄違ノ抗辯ニ限り之ヲ適用ス二六〇、二〇八、三〇、三一、九ノ二、三

被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ム權利ナシ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得二〇七

第三百八十條 第二百二十二條、第二百六十六條乃至第二百七十二條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス三七五ノ一、構二一ノ一

然レトモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲メ必要ナルモノニ限り調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ一三九、一三〇

第三百八十一條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ

其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出ス可キコトヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得一〇、一九〇、一三五、二九、三〇

當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルトキハ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ一三〇ノ二一三一、五五九

和解ノ調ハサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス三七八、三八〇

相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルトキハ此カ爲ニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス七九、七二八四

和解ノ申請

府縣市町村番地族業	申請人	氏	名
府縣市町村番地族業	被告人	氏	名

和解ノ目的物

一何々事件(物)ノ引渡、計算事件ノ如キ)

事實

何々(其事實ヲ標記ス可シ)

右申請人ヨリ被申請人ニ係ル前記ノ目的物ニ付キ到底訴訟ヲ爲スヲ免レスト雖トモ其前ニ於テ一應和解ヲ試  
ミ度候間被申請人氏名御呼出相成和解被成下度申請仕候也

年月日

申請人

氏

名

何裁判所判事 氏 名殿

第二節 督促手續

第三百八十二條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付  
ヲ目的トスル請求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラスシテ督促手續ニ依リ條件  
附ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發センコトヲ申立ツルコトヲ得五八六ノ二、一九一、四八  
申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サ

ルトキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若クハ公示送達ヲ以テ爲ス可キトキハ  
督促手續ヲ許サス三八五、三八六、一五三一、一五八、三五

第三百八十三條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス

此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ事物ノ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ  
於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ  
專屬ス一〇一、一四、二二、二三、一五、二一、二四

第三百八十四條 支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ  
得二三五

此申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス一九〇

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示若シ請求ノ數箇ナルトキハ其各  
箇ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示

實例民事訴訟法 區裁判所ノ訴訟手續

第三 支拂命令ヲ發セシムコトノ申立

支拂命令ノ申請

府縣市町村番地族業	申請人	氏	名
府縣市町村番地族業	被申請人	氏	名

請求ノ目的物

一金何圓(又ハ物品、有價證券ノ類) 元 金  
 一金何圓 利 子

合計金何圓也

右ハ被申請人ヨリ申請人ニ對シ年月日限り何々(金圓又ハ物品類)ヲ返濟スヘキ約束ノ處被申請人ハ其期日ニ至ルモ  
 (支拂)又ハ(引渡)ヲナサ、ルニ依リ右(金額)(物品)並ニ此督促費用金何拾錢ニ付キ支拂命令ヲ發セラレ度此  
 段申請仕候也

年 月 日

申請人	氏	名
-----	---	---

何區裁判所判事 氏 名殿

第三百八十五條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請力前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ  
 旨趣ニ於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキコトノ顯ハルルトキハ其申請ヲ却下ス

三八二―三八三

請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキハ亦其申請ヲ却下ス然レ  
 トモ數箇ノ請求中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモノニ理由アリト見ユルトキハ其  
 理由アリト見ユルモノニ限り申請ヲ許容ス一九一  
 右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ通常ノ訴訟手續ニ依リ  
 訴追スルヲ妨クルコトナシ

決 定

府縣市町村番地族業	申請人	氏	名
-----------	-----	---	---

實例民事訴訟法 區裁判所ノ訴訟手續



府縣市町村番地族業

被申請人 氏 名

申請人ヨリ被申請人ニ對シ年月日何々請求ノ支拂命令ノ申請ヲナシタルニ其請求タル反對給付ヲナスニアラサレハ請求ヲ主張シ能ハサルモノニ付キ支拂命令ヲ發スヘキモノニアラス仍テ如左決定ス  
本件ノ申請ハ之ヲ却下ス

年 月 日 何裁判所 判 事 氏 名

第三百八十六條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊セスシテ之ヲ發ス三八七、三八八、一九〇  
支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強制執行ヲ避ケント欲セハ此命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債務者ニ辨濟ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ一七〇ノ二、八四、三九五  
前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ三日マテニ之ヲ短縮スルコトヲ得四九六ノ三

支拂命令

府縣市町村番地族業  
申請人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被申請人 氏 名

一 零何圓(物品何々) 元 金  
一金何圓 督促費用  
右債務者氏名ハ本命令ノ送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ前記金額(物件)ヲ債權者氏名ニ辨濟(引渡)スヘク又ハ當區裁判所ヘ異議ノ申立ヲ爲ス可シ  
此期間内ニ辨濟(引渡)ヲ爲サス又ハ異議ヲ申立サルトキハ債權者ノ申立ニ因リ此命令ノ假執行ヲ宣言スルコトアル可シ

年 月 日 何裁判所 判 事 氏 名

(注意、十四日ノ期間ハ短縮スルコトヲ得故ニ之ヲ短縮セントスルトキハ支拂命令ノ申請ト全時ニ其申請ヲ爲ス可シ又支拂命令ハ之ヲ取下ルコトヲ得、書面ニテ爲ストキハ一九八ノ文例ニ準シ口頭ニテ爲ストキハ其旨ヲ調査ニ記シテ明確ニ爲スヘシ)

實例民事訴訟法 區裁判所ノ訴訟手續

第三百八十七條 權利拘束ノ效力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル

支拂命令ノ送達ハ之ヲ債權者ニ通知ス可シ三八六、一九五、三九八、三九四、三九〇  
三七一、三九三、一九八、二三六、一五一

第三百八十八條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得一三五、三八九、三九五

支拂命令ニ對スル異議ノ申立(注意、口頭ニテ申立ルコトヲ得)

府縣市町村番地族業

申立人 氏 名

府縣市町村番地族業

被申請人 氏 名

年(何)第何號支拂命令事件ニ付キ年月日右命令送達相成候處申請人ニ於テ之ニ應スヘキ義務無之候間茲ニ異議ノ申立ヲ仕候也

年月日

申立人

氏

名

何裁判所判事 氏 名殿

第三百八十九條 債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツル

トキハ支拂命令ノ效力ヲ失フ然レトモ權利拘束ノ效力ヲ存續ス三八五、三九〇、  
三九一、二二

數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用ノ部分ニ付キ效力ヲ有ス三八六、二

第三百九十條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴カ

區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ其訴ハ支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辯論ノ期日ハ第三百七十七條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ之ヲ定ム三八六、二、三七三、以下三八三、一九五、三七七、構一四

第三百九十一條 請求ニ付キ起ス可キ訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタルコトヲ債權者ニ通知ス可シ三八四、四八九、二九一、三一

債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一个月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起ササルトキハ權利拘束ノ效力ヲ失フ三九二

第三百九十二條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス三九〇、三九一

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起ササルトキハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸スニ七

第三百九十三條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルトキニ限ル五五九、五六〇、五六一、三九四、二五五ノ二、五二八、三九四

右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル手續ノ費用ヲ掲ク可シ三八六ノ二  
債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得五五八、四六六

支拂執行命令ノ申請

府縣市町村番地族業  
申請人 氏 名

府縣市町村番地族業  
被申請人 氏 名

一金何圓(物件類) 元 金  
一金 費用

右申請人ヨリ被申請人ニ係ル年何第何號何々事件ニ付キ年月日支拂命令ヲ相發シ候處其期間ヲ經過スルモ未タ支拂チナサス又ハ異議ノ申立チナサルニ付キ假執行ノ命令御發シ相成度申請仕候也  
年 月 日  
申立人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

支拂執行命令

府縣市町村番地族業  
申請人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被申請人 氏 名

實例民事訴訟法 區裁判所ノ訴訟手續

一金何圓 (物件類)

一金何圓

右債務者ハ此命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ前記金額ヲ辨濟ス可ク又ハ當區裁判所ニ異議ヲ申立ツ可シ  
若シ此期間内ニ辨濟ヲ爲サス又ハ異議ノ申立ヲ爲サルトキハ債權者ノ申請ニ因リ此命令ノ假執行ヲ宣言ス  
ルコトアル可シ

年月日

何區裁判所

此支拂命令ニ記載シタル金額及本手續ニ關シ價額者ノ計算シタル費用金……………ニ付キ假ニ執行シ得ヘキコ  
トヲ宣言ス

年月日

何區裁判所

判事

氏

名

(注意、此申請ヲ却下スル時ハ抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ其文例ハ抗告ノ部ニ在ル各文例ニ準ス(四五七四、  
六四))

第三百九十四條 執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル闕席判決ト同一ナリトス(四七一  
其執行命令ニ對シテハ第二百五十五條乃至第二百六十四條ノ規定ニ從ヒテ故障ヲ申

立ツルコトヲ得請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上  
ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於  
テハ第三百九十一條第二項ニ定メタル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ以テ始マルニ  
六〇、五一〇、五五〇、五二二、五〇〇、四〇〇ノ一

支拂命令ニ對スル故障ノ申立

府縣市町村番地族業

申立人

氏

名

府縣市町村番地族業

被申請人

氏

名

年何第何號支拂命令事件ニ付キ年月日假執行ヲ爲スヘキ支拂執行命令ヲ送達相成候得共右命令ニ應スヘキ義  
務無之ニ因リ故障ノ申立ヲ致シ候間本訴訟ニ於テ被申立人ノ請求ヲ棄却相成度要求仕候也

年月日

申立人

氏

名

何區裁判所判事 氏 名殿

實例民事訴訟法 區裁判所ノ訴訟手續

判決

府縣市町村番地族業  
 申請人 氏 名  
 府縣市町村番地族業  
 被申請人 氏 名

申立人ハ年(何)第何號支拂執行命令ニ付キ故障申立ヲナシタルニ因リ其適否ニ付キ判決スル如左  
 故障ノ申立ハ之ヲ(許可)(棄却)ス

理由

申立人ハ云々(理由ヲ記ス)主文ノコトヲ判決ス

年月日

何裁判所

判事

氏

名

(注意、此文例ハ區裁判所ノ管轄權ナキトキ故障ノ許可ヲ判決スルモノナリ故障ノ申立ニ棄却スルトキハ管轄ノ有無ニ掲ハラズ區裁判所ニテ右文例ニ因リ之ヲ爲ス棄却ニ付テハ上訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ區裁判所ニテ管轄權アルトキハ本按ト共ニ故障ノ許可ヲ定ムルモノトス)

故障ノ申立ヲナシタルトキハ假執行ノ停止ヲ申立ツヘシ其文例ハ第五二二條第五〇〇條ノ文例ニ準スヘシ)

第三百九十五條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス  
 此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス三八六ノ二、三八八

決定

府縣市町村番地族業  
 申立人 氏 名

年(何)第何號ノ支拂命令ニ付キ年月日申立人ヨリ異議ノ申立ヲナシタルヲ以テ支拂命令送達ヨリ十四日ノ期間ヲ經過シタル申立ニ付キ決定スル如左  
 本按異議ノ申立ハ之ヲ却下ス

年月日

何區裁判所

判事

氏

名

第三編 上訴

第一章 控訴

第三百九十六條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス 二〇七ノ二、二二八ノ二、四九一ノ三、三九四ノ二、四九、五〇五、四ノ一、二〇七ノ二、二二八ノ二、四九一ノ三、三九四ノ二、四九、五〇五、四ノ一、

第三百九十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス 二二七、二四五、三五一、一一三、一一九、一一八、二〇三、二二〇、二六六、六八ノ三、三八五ノ三、三九五ノ二、五〇〇ノ三、五一ノ三、五四八ノ三、五四九ノ四、三八、二四一ノ三、七七四ノ一、四六ノ三、五四ノ四、五七ノ三、八三ノ二、一〇二ノ三、一八九、一九二、二四一ノ三、二五三、五七七ノ二、三〇一ノ二、三〇五ノ二、四五五

第三百九十八條 闕席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス但故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルトキニ限り控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得 二四六、二四八、二七七ノ二、二六三ノ二、二六三ノ二、二五〇、二五〇、二五〇

第三百九十九條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ナクシテ之ヲ取下クルコトヲ得一九八ノ一

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スル結果ヲ生ス

控訴取下ノ文例ハ第一九八條ノ文例ニ準ス可シ

第四百條 控訴期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル 一八八ノ一、一六八ノ二、一八六、一七四、二三八、四八一、五〇、二二五ノ二、二二六ノ一、五三、五八、四一〇

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス

第二百四十二條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ追加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタルトキハ控訴期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對スル控訴ニ付テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マルニ 四二ノ三、二二〇

第四百一條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス 四一五、一〇六ノ一、 此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 控訴セラルル判決ノ表示二五六

第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述二五六

此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル變更ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ若シ新ニ主張セントスル事實及ヒ證據方法アルトキハ其新ナル事實及ヒ證據方法ヲモ掲ク可シ一九〇、二〇七、四一五、四一三

控訴狀

府縣市町村番地族業

控訴人 氏 名

府縣市町村番地族業

被控訴人 氏 名

何々事件ノ控訴

判決ノ表示

何裁判所ニ於テ年何第何號何事件ニ付キ年月日何々ト判決言渡アリ年月日該判決ノ送達ヲ受タリ

一定ノ申立

右判決ノ全部若クハ何ノ部分ヲ廢棄シ何々ト判決相成度候也

不服ノ程度及控訴ヲ爲ス旨ノ陳述

何裁判所ハ何々ノ事實ヲ何々ト誤認シ(何々ノ訴訟手續又ハ何々ノ法則ニ違背シ)何々ト判決シタルハ不當ナリ依テ控訴人ハ右何々ニ付テハ服從スルコト能ハサルニ因リ今般控訴シタル次第ナリ(不服ノ事項數値アレハ一々記載ス可シ)

新事實

何々(新ニ主張スル事實アレハ之ヲ掲ケ)

新證據方法

一何々(新ニ主張スル事實アレハ之ヲ掲ケ)

附屬書類

何々(代理委任狀證書其  
他ノ書類ノ題目)

年月日

右控訴人

民

名

實例民事訴訟法 上訴 控訴

何控訴院長判事 氏 名殿

第四百二條 判然許ス可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル控訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス二五七、三九六、三九八、二二七、三九七、四〇一、四〇〇、二七三、三七此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得四六七

本條却下ノ命令ハ第二五七條ノ文例ニ準ス可シ

此却下ニ對スル抗告ニ關スル文例ハ抗告ノ部ニ在ル各文例ニ準ス可シ

第四百三條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス四〇一

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且被控訴人ノ一定ノ申立及ヒ其主張セントスル新ナル事實及ヒ證據方法ヲ掲ク可シ一九九ノ二、四〇七、一〇五、一〇八、四

一五

答辯書

府縣市町村番地族業	府縣市町村番地族業
控訴人 氏 名	控訴人 氏 名
被控訴人 氏 名	被控訴人 氏 名

何々控訴事件ノ答辯

一定ノ申立

控訴人ノ申立ハ理由ナキヲ以テ控訴棄却相成度候也

新事實

何々(新ニ主張スヘキ事實アラハ)

新證據方法

一何々(新ニ提出スル證據方法アラハ)

附屬書類

一何々

實例民事訴訟法 上訴 控訴



年月日

右

何控訴院長判事 氏 名殿

被控訴人 氏

名

第四百五條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得四一〇ノ一、四〇六ノ二、三九六、三九八、四〇五

闕席判決ニ對シ附帶控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトニ付テハ第二百九十八條ノ規定ニ從フ一七七ノ二、二六三ノ二

附帶控訴ハ控訴狀ノ文例ニ準ス可シ但シ答辯書ハ其主張ノ旨趣ヲ記スルノミニテ足ル又相當ノ訴訟印紙ハ之ヲ帖用ス可シ

第四百六條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其効力ヲ失フ

第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキ四一九

第二 控訴ヲ取下ケタルトキ三九九、七七ノ二

然レトモ被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做

ス四〇五

第四百七條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之控訴人ニ送達ス可シ四〇五、四〇四、一〇八、一三六

第四百八條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス<sup>一九〇―三七二、四八四―四九六、四〇九―四三一</sup>

控訴ニ於テ必用ナル場合ニハ第九拾條乃至第三百七十二條ニ在ル各文例ヲ準用ス可シ

第四百九條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ其兩控訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ以テ通例トス四〇五、四〇三、二三八、四二〇、一六七

第四百十條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間ノ未タ經過セサルトキハ其申立ニ因リ期間ノ滿了マテ之ヲ延期ス

闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期

ス二五五、三九六、二五九ノ二、二六〇、五一、五四八

第四百十一條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論スニ二二

第四百十二條 當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲メ必要ナル限リハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス可シ  
四三一、二二四ノ一

演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ補完ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サシム可シ

第四百十三條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキト雖モ之ヲ許サス一九五、一九六、四一六  
第四百十四條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス可カラサルモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ主張スルコトヲ得二〇六、二九一、三一、四〇八、四一五

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得二〇七

第四百十五條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セサリシ攻撃防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得四一六、四一八、二二〇、二七二、二七四、三四一、三四七、二一九、七八ノ二

第四百十六條 新ナル請求ハ第九十六條第二號及ヒ第三號ノ場合又ハ相殺スルコトヲ得ヘキモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ起スコトヲ得二一一、一一八

第四百十七條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲ササリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得一一一、二四八、二七二、三四一

第四百十八條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二審ニ於テモ亦其效力ヲ有ス  
一一四、三六一、三六四、一一一、二七二、三四一、六八、二三〇、二四八、一三一

第四百十九條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否ヤ又控訴ヲ法律上ノ方式ニ從ヒ若ク

ハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可シ  
四〇二、三九六、三九八、八二、  
四〇一、二一、二七、三七

判決

府縣市町村番地族業	氏	名
控訴人	氏	名
府縣市町村番地族業	氏	名
被控訴人	氏	名

年何第何號何々控事訴件ニ付キ判決スル左ノ如シ

本按無訴ハ之ヲ棄却下ス

理由

控訴人ハ何裁判所ニテ言渡シタル判決ニ對シ年月日控訴ヲナシタルニ因リ當裁判所ハ職權調査ヲナシタルニ何々(期間經過)又ハ(法律上ノ方式ニ從ハス)タルヲ以テ不適法トシテ棄却スヘキヲ相當ス仍テ主文ノ如ク判決ス

年月日

何裁判所民事部(控訴院ナレハ五人トス)

裁判長	判事	判事	判事
	氏	氏	氏
	名	名	名

第四百二十條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ變更スルコトヲ得ニ  
三一、四一一、三九七

第四百二十一條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ關スル總テノ争點ニシテ申立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要トスルモノハ第一審ニ於テ此争點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ササルトキト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲ス  
四二二、四二三、四二二、二二六、二一九、二三〇、四一五、四二二、四〇八、二一七、三三七、三一七

第四百二十二條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ尙ホ辯論ヲ必要トスルトキハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ  
二〇七ノ二、二二八ノ二、四九一ノ三

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ナルトキ三九八

第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ニ對スル故障ヲ不適法トシテ棄却シ

タルモノナルトキ二五九ノ二

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルトキ二〇七、四一四

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ争アル場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルトキ二二八

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ別訴訟ヲ以テ追行ヲ爲ス權ヲ留保シタルモノナルトキ四九一、四九二

第四百二十三條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得四二一、一四、四三五、四三六、市三一、町村六八、民三二〇、五二

第四百二十四條 控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ四二〇、四二二、四二三

判決

府縣市町村番地族業	
控訴人	氏
名	
府縣市町村番地族業	
被控訴人	氏
名	

右當事者間年(何)第何號何々事件ノ控訴ニ付キ當裁判所ハ判決スル如左

主 文

本件控訴ハ之ヲ棄却ス

又ハ 原判決ハ之ヲ廢却ス

被控訴人ハ何々スヘシ

本件ヲ第一審裁判所ヘ差戻ス

原判決中何々ノ部合ヲ何々ト變更ス

訴訟費用ハ第一、二審共(控訴)(被控訴人)ノ負擔トス

事 實

控訴人ハ原判決ノ全部ヲ廢棄シ被控訴人ハ控訴人ニ何々ヲ爲ス可シトノ判決ヲ要メ被控訴人ハ控訴棄却ノ判

實例民事訴訟法 上訴 控訴

決ヲ要メ而シテ各當事者ノ事實上ノ主張ハ原判決ニ指示スル處ト同一ナルヲ以テ之ヲ採用ス

理由

控訴人ハ云々破控訴人ハ云々ト云フニ在リ仍テ之ヲ審按スルニ云々仍テ民事訴訟法第何條ニ因リ主文ノ如ク

判決ス

何裁判所民事部(控訴院ナレハ五人トス)

裁判長 判 事 氏 名

判 事 氏 名

判 事 氏 名

第四百二十五條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得四一九、二三一

四二一、四二〇、四〇九、四〇五

第四百二十六條 第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防禦ノ方法ヲ却下スルトキハ其防禦ノ方

法ヲ主張スル權ハ之ヲ被告ニ留保ス可シ二一〇

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ツ

ルコトヲ得二四二

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス四九一、四三二

第四百二十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第

二審ニ繫屬ス二一〇、四二六、一八八

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キコトヲ言渡シ竝ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ七八

第四百二十八條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルトキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ二四七、二四八、二四九、二五二、二五四、二五五、一八八

本條ノ欠席判決文例ハ第二百四拾七條ノ欠席判決ノ文例ニ準ス

第四百二十九條 被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ闕席判決ノ申立ヲ爲ストキハ第一審裁判ノ證憑ト爲リタルモノニ抵觸セサル控

實例民事訴訟法 上訴 控訴

訴人ノ事實上ノ供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做シ闕席判決ヲ爲ス  
二五二、二五四、二四八、二三〇、二三六、四一五、四一八、二一六、二五五、四二八

本條欠席判決文例ハ第二百四拾八條ノ欠席判決ノ文例ニ準ス

第四百三十條 判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得 二三六、四二〇、四三二、四二四

第四百三十一條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ム可シ 四〇二、二五九、四〇三、四〇一、二二六、二〇七、二二八、一八八

訴訟記録送付要求書

貴廳年(何)第何號何々事件ニ付キ控訴人氏名年月日控訴ノ提記有之候條該訴訟記録御送付相成度候也

年月日

何裁判所 書記 氏 名

何裁判所書記 氏 名殿(又ハ書記課御中)

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ 五二四、五一七、二二、八四、四九九

### 第二章 上告

第四百三十二條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス 三九六、二〇七、二二八、二、四九一、三、四二六、三

第四百三十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス  
三九七、二八三、二二七、三、一七一、四、一九七、二七三、三六八、九ノ四、二四一、三、七七四、一、三八、四一、四六、三、五一、四、五七、三、八三、二、八五、三、一〇二、三、一八九、一九二、三、二四一、三、二五三、二五七、二、二九四、三、三〇一、三、三〇二、二、三〇五、二、三二二、三、三九三、三、四〇二、二、四五五、四七六、二、一、五五八、六八二、二、七五四、四、七三九、三

第四百三十四條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得 四三五、四三六、四四六、一、四五三

實例民事訴訟法 上訴 上告



ル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ且法則ヲ適用セス若クハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表示又ハ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示又ハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若クハ遺脱シ若クハ提出シタリト看做シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其事實ノ表示ヲ掲クハシ一〇五一一〇八、四三四、四三五、四四七ノ二、四四六

上告狀

府縣市町村番地族業  
上告人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被上告人 氏 名

判決ノ表示

年月日何裁判所ニテ何々ト言渡サレタル年何第何號何々事件ノ判決

一定ノ申

右判決ノ全部(又ハ何々ノ一部)(反訴)ニ付キ不服ナルニ因リ其全部(又ハ其一部)(反訴)ヲ破毀セラレンコトヲ請求ス

理由

第一点云々(原裁判所カ何々ト判決シタルハ何々ノ法律ヲ適用セス差クハ不當ニ適用セシ違法ノ判決ナリ)  
第二点云々(原判決中何々ハ民事訴訟法第何條ノ規定ニ違背シタル違法ノ判決ナリ)  
第三点云々(原判決中何々ハ何々ノ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若クハ遺脱シ若クハ提出シタリト看做シタル違法ノ判決ナリ)

年月日

右上告人 氏 名

何々院長判事 氏 名殿

附屬書類

何委任狀

一法律上代理受權ノ證

(注意、附帶上告(四四二)ニ對スル答辯書ハ第四四一條ノ文例ニ準ス可シ)

第四百三十九條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許スヘカラサルモ

實例民事訴訟法 上訴 上告



ノナルトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起ササルトキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ四三二、四三八ノ二、四三七、四三四、二五七、四〇二、四五二  
上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルトキハ上告ヲ取下ケタルモノト看做ス但出頭セザリシコトヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由ヲ以テ辯解シタルトキハ更ニ期日ヲ定ム二二〇、三九九ノ二、四五四、四三一

本條ニテ上告ヲ棄却スルトキハ第四四八條ノ文例ニ準スヘシ

第四百四十條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス一九九、四〇三、一九四、四四一

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四十一條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且一定ノ申立ヲ掲クヘシ四三八、四四〇、四〇四、一〇五一、一〇八、四四二、四四三

答辯書

府縣市町村番地族業  
上告人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被上告人 氏 名

一定ノ申立

本訴ノ上告ハ之ヲ棄却セラレシコトヲ請求ス

理由

第一点 原裁判所カ何々ト判決シタルハ何々ノ法則ヲ適用セス若クハ不當ニ適用セシ違法ノ判決ニ非ラス  
第二点 原判決中何々ハ民事訴訟法第何條ノ規定ニ違背シタル違法ノ判決ニ非ラス  
第三点 原判決中何々ハ何々ノ法律ニ違背シ事實ヲ確定シ若クハ遺脱シ又ハ提出シタリト看做シタル違法ノ判決ニ非ラス

年月日

右被上告人

氏

名

何院長判事 氏 名殿

實例民事訴訟法 上訴 上告

一何委任状ノ類

第四百四十二條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲スコトヲ得四三四、四四三

此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス四〇五、四〇六

附帶上告ハ第四三八條ノ文例ニ準ス

第四百四十三條 答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ上告人ニ送

達スヘシ四四一、一三六、四〇七

第四百四十四條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ

準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス四〇八、一九〇、一三七二、四八四、四九六、四四五、四五四、

二四六、二四八、四二九

第四百四十五條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ付キ調査ヲ爲ス二二二、

第四百四十六條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所カ其裁判ノ憑據トシタル

事實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四百三十八條第三項ニ掲ケタル事實ニ限り之ヲ斟酌  
スルコトヲ得四三八、二二九

證據調ヲ必要トスルトキハ上告裁判所ハ之ヲ命スヘシ

第四百四十七條 上告ヲ理由アリトスルトキハ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ破毀スヘ

シ四四八、四五二、四二二

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スルトキハ其違背シタル部分  
ニ限り訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百四十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百五十一條ノ規定ヲ除ク外更ニ辯  
論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判  
所ニ移送スヘシ四四九、四五二、四二二、四二二、二二二、二二二

事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス一  
八八、四四九、四五〇

判決

二五四

府縣市町村番地族業  
 上告人 氏 名  
 府縣市町村番地族業  
 被告 氏 名  
 被告 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何請求ノ上告事件ニ付キ上告人ハ原判決ヲ破毀ストノ判決ヲ要ムト申立被告上告人ハ上告棄却ノ判決ヲ要ムトノ申立ヲナシタルニ因リ當院ハ判決スル左如  
 本件上告ハ之ヲ棄却ス

事實理由

又ハ原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及裁判ヲナシムル爲メ本件ヲ何裁判所ヘ差戻ス(移送ス)  
 上告論旨第一点ハ上告人ハ何々ト云フニ在リ(上告論旨摘示)  
 因テ案スルニ云々(説明)  
 上告論旨第二点ハ上告人ハ云々(上告論旨摘示)  
 因テ案スルニ云々(説明)  
 右ノ如クナルヲ以テ本件上告ハ(理由ナキヲ以テ)又ハ(理由アルヲ以テ)民事訴訟法(第四百三拾九條)又ハ

(第四百四拾七條第四百四拾八條)又ハ(第四百五拾二條)ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス  
 年月日

何院民事部  
 裁判長 判 事 氏 名  
 (外ニ列席判事ヲ記ス)

(注意、第四五一條ニ因リ上告裁判所ニテ直チニ裁判ヲ爲ストキハ前文例ニ準スヘシ又上告論旨數点アル場合ニ於テ其一点ヲ以テ原判決全部ヲ破毀スルニ足ルトキハ他ノ論点ニ付キ説明ヲ爲スニ及ハス)  
 第四百四十九條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケル口頭辯論ニ當リ提出スルコトヲ得ヘカリシ事項ヲ新口頭辯論ニ際シ提出スル權利アリ四一五―四一七  
 第四百五十條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニシテ判決ヲ破毀スル基本ト爲シタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲ス義務アリ構四八

第四百五十一條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ四四八

第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲ニ判決ヲ破毀

實例民事訴訟法 上訴 上告

二二五

シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第二 無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲ニ判決ヲ破毀スルトキニ〇六ノ二九

第四百五十二條 上告テ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ四三九

第四百五十三條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁

判ノ正當ナルトキハ上告ヲ棄却ス可シ二四四

第四百五十四條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 闕席判決ニ對スル不服ノ申立ニ九八、四〇五ノ二

第二 控訴ノ取下三九九

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障ト

ヲ同時ニ爲シタルトキノ訴訟手續四〇九、四一〇ノ二

第四 口頭辯論ノ延期四一〇ノ二

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述四二二

第六 妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論四一四

第七 控訴ヲ起シタル者ノ不利益ト爲ル裁判ヲ爲ス可カラサルコト四二五

第八 記録ノ送付並ニ返還四三一

本條ニ準用スル控訴規定ニ關スル各文例ハ本條ノ場合ニ之ヲ準用ス可シ

### 第三章 抗告

第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判

ニ對シ其他此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得<sup>二八、五二、一〇一、  
一七、五四三、五四</sup>  
<sup>七、五四九、五六五、七三五、七四一、七五六、七五七、七二一、三八、四一、四六、五四、五七、八三、八五、一〇二、一  
八九、一九二、二四一、三五三、二五七、二九四、三〇一、三〇二、三三三、三三八、三〇五、三九三、四〇二、四七六、  
五五八、六八〇、七五四、七六九</sup>  
據<sup>二六、三七、五〇</sup>

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス據<sup>二六、三七、五〇</sup>

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキニ  
非サレハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬  
スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス四六一、四五九  
訴訟カ區裁判所ニ繫屬シ若クハ管テ繫屬シタルトキ又ハ證人、鑑定人ヨリ若クハ證  
書ヲ提出スル義務アリト宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ之  
ヲ爲スコトヲ得一三五、二九四、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三四二、三四三

抗告狀

府縣市町村番地族業

抗告人 氏 名

何裁判所年何第何號何々事件ニ付キ何裁判ハ年月日何々ト決定シタルハ不當ナルニ因リ抗告仕候次第左ニ開

陳仕候

一何々(其ノ不當ノ理)  
由テ記ス可シ)

右ノ理由ナルヲ以テ原決定ヲ御取消シノ上何々ト御決定相成度候也

一何々(委任狀ノ類)

右抗告人

氏

名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、第二五三條、第六八〇條、第七六九條三項ノ場合ニハ言渡ノ片日ヲ掲ケ可シ)

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ憑據ト爲スコトヲ得四一五

第四百五十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考

案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナ  
シトスルトキハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ告抗ヲ抗告裁判所  
ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送付ス可シ四五七、一七〇

意見書

年何第何號何々事件ニ付キ年月日言渡シタル何々決定ニ對シ抗告人ハ年月日抗告ニ爲シタリ仍テ當裁判所  
(裁判長)ハ左ノ意見ヲ開陳ス

一何々(理由ナキコト)  
ヲ記ス可シ)

右ノ理由ナルヲ以テ抗告ハ理由ナキモノト思料候條抗告棄却ノ決定相成度候也

年月日

何裁判所

判 事

氏

名

實例民事訴訟法 上訴 抗告

(注意、抗告ノ理由アリトシ決定ヲ更正スル時ハ第二四三條ノ文例ニ準シ更正ス可シ)

執行中止ノ申請

府縣市町村番地族業

申請人 氏 名

何當事者間(何)ノ何號何々事件ニ付キ何裁判所ニ於テ何々トノ決定言渡アリタルヲ以テ年月日其ノ決定ニ對シ抗告ヲナシタルニ因リ其ノ裁判前ニ在テ右決定ヲ執行セラル、ニ於テハ回復スヘカヲサル不利益アルヲ以テ該裁判アルマテ執行中止相成度申請仕候也

年月日

申請人 氏 名

何裁判所辦事 氏 名殿

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限り執行停止ノ效力

ヲ有スニ九四、三〇一、五〇二、六八〇

然レトモ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁

判アルマテ其執行ノ中止ヲ命スルコトヲ得

抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ執行中止ヲ

命スルコトヲ得

命令

府縣市町村番地族業

申請人 氏 名

右申請人ハ年何第何號何々事件ニ付キ何裁判所ノ與ヘタル決定ニ對シ不服ノ抗告ヲナシタルニ因リ其ノ抗告裁判マテ右決定ノ執行ヲ中止セラレ度キ旨ノ申請ヲナセリ當裁判所ハ其請求ヲ理由アリト認メ決定スル左ノ如シ

何裁判所年(何)第何號何々事件ニ付キ何裁判所カ年月日言渡タル裁判ハ本按抗告裁判マテ執行中止ヲ命ス

年月日

何裁判所 判 事 氏 名

(注意、職權ヲ以テ執行中止ヲ命スル文例モ之ニ準ス又裁判長若クハ裁判所ノ爲ス時ハ前同一ノ文例ニ準ス可シ)

實例民事訴訟法 上訴 抗告

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限り直チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得四

五七

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記録ヲ要求スルコトヲ得四五九

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルトキハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ四六六

貴廳<sup>(何)</sup>第何號何々事件ニ付キ年月日言渡シタル決定ニ對シ抗告人氏名ヨリ急迫トシテ當廳へ直ニ抗告提出相成候ニ付キ右抗告狀回送候條意見書提出相成度及要求候也

年月日

何裁判所 判事 氏名

何裁判所 氏名

(注意、急迫ト認メス事件ヲ原裁判所へ送付スル文例モ之ニ準ス可シ)

通知

府縣市町村番地族業

利害關係人 氏名

年(何)第何號何々事件ニ付キ氏名ヨリ抗告ノ申立テナシタルニヨリ意見アラハ書面ヲ以テ陳述ヲ爲スヘシ

年月日

何裁判所 判事 氏名

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ以テ通例トス一〇三

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルコトヲ得

陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得四五七ノ二、二三五

抗告裁判所ハ口頭辯論ノ爲ニ當事者ヲ呼出スコトヲ得

抗告ニ對スル意見書

抗告人氏名ハ年(何)第何號何々事件ニ付キ年月日何裁判所ノ言渡シタル決定ニ對シ抗告ヲ爲シタルニ因リ左ニ意見ヲ開陳仕候也

實府民事訴訟法 上訴 抗告

一 抗告人ハ何々ト云フモ何々タレハ抗告ノ理由トナラサルモノトス  
一 抗告人ハ事實何々ト云フモ何々タル事實ナシ其主張ハ誤リナルコト  
右ノ理由ナルヲ以テ抗告ハ理由ナキモノト思料シ意見ヲ提出仕候也

年月日

利害關係人 氏

名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、口頭辯論ヲ爲ストキハ通常ノ呼出狀ニテ當事者ヲ呼出ス可)

第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其  
期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ  
二五九、四一九、四七八、四五五、  
四五七、四六五、四六六、七七

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不合法トシテ棄却ス可シ

第四百六十四條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルトキハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立  
テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲  
シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得  
七七、四五〇、二四五、七  
二五七、三〇一、三三二、  
五九、八五、七三、二四一、五五八、七五四、七五六

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ  
通知ス可シ

決定

府縣市町村番地族業

抗告人 氏

名

年(何第何號何々抗告事件ニ付キ決定スル左ノ如シ)

(本件抗告ハ之ヲ棄却ス)

又ハ原決定ハ之ヲ廢棄ス

抗告人申立ノ如ク何々トス又ハ裁判所若クハ裁判長ニ裁判ヲ爲スコトヲ委任ス

理由

抗告人ノ主張ハ何々ト云フモ.....仍テ主文ノ如ク決定ス

年月日

何裁判所判事(干與ノ判事)  
ヲ記ス可シ)

判事 氏

名

(注意、職權調査ニ因リ抗告ヲ不合法トシ棄却スル文例モ右文例ニ準ス可シ)

實例民事訴訟法 上訴 抗告



第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ム

ルニハ先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ  
二六六、二七三、二七八、二七九、二八三、一七二、二六七、  
二六九、二七八、二八二、三一九、二二四、四九九、五一六、  
五一七

抗告ハ受訴裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得五二三、五六二、四六六、四五五  
第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス

(受命)(受託)判事裁判ノ變更ヲ要スル申請書

府縣市町村番地族業

申請人 氏 名

何裁判所年(何第何號何々事件ニ付キ(受命)(受託)判事ハ何々ノ事柄ニ關シ何々ト決定ヲ爲シタルハ失當ノ裁  
判ト思料候間其ノ決定ハ何々ト變更ノ決定相成度申請仕候也

年月日

右申請人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、書記ノ處分ノ變更申立モ此ノ文例ニ準ス可シ)

決 定

府縣市町村番地族業

申請人 氏 名

年(何第何號何々事件ニ付キ(受命)(受託)判事ノ爲シタル何々ノ決定ニ對シ變更ノ申立ヲ爲シタルニ因リ決定  
スル左ノ如シ  
本申請ハ之ヲ棄却ス(又何々ノ決定ヲ何々ト變更ス)

理 由

申請人ハ云々ノ請求ヲナシタルモ何々……………ニテ理由ナシ又 何々タルヲ以テ……………理由アリ……………仍テ主  
文ノ如ク決定ス

年月日

何裁判所 判 事 氏 名

(注意、右裁判ニ付キテ爲ス抗告及決定ノ文例ハ抗告ノ部各文例ニ準ス可シ)

第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ四五五、四六六

抗告ハ七日ノ不變期間内ニ之ヲ爲ス可シ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始マリ第二百五十

實例民事訴訟法 上訴 ○告

三條、第六百八十條及ヒ第七百六十九條第三項ノ場合ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始マ  
ル抗告裁判所ニ抗告ヲ提出シタルトキハ急迫ナラスト認メタル場合ニ於テモ亦不  
期間ヲ保存ス一六四一七二、二五五、四〇〇、四三七、六八〇、七六九ノ三、四六一  
再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルトキハ不變期間ノ滿了後ト雖モ此訴ノ爲メ定メ  
タル期間内ハ抗告ヲ爲スコトヲ得四六八、四六九、四七四  
前條第一項ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變期間内ニ受訴裁  
判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請ヲ正當ト認メサルトキハ之ヲ抗  
告裁判所ニ送付ス可シ四六五

第四編 再審

第四百六十七條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ハ取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴  
ニ因リ之ヲ再審スルコトヲ得三九六、四三三、二〇七ノ二、二三八ノ二、二四六ノ三、四九一  
當事者ノ一方又ハ雙方ヨリ此兩訴ヲ起シタルトキハ原狀回復ノ訴ニ付テノ辯論及ヒ

・裁判ハ取消ノ訴ニ付テノ裁判カ確定スルマテ之ヲ中止ス可シ一八九

第四百六十八條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ 四三六、二二三、二二九、一三三、二五七、  
五八、六〇一、六二、六五、六七、七二、八  
一、二一、三二、四〇、四一、九一

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但  
忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限  
ニ在ラス三三、三三、三八、四三三

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メラレタルニ拘ハラズ裁判  
ニ參與シタルシトキ三三、三八

第四 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレサリシトキ  
四三六、五號、四三、四六、四七、六三、七〇

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシト

キハ取消ノ訴ヲ許サス

第四百六十九條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴訟ニ關シ犯シタル判事カ  
裁判ニ參與シタリシトキ刑二七三―二九一

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人又ハ相手方若クハ其法律  
上代理人若クハ訴訟代理人カ罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシトキ  
刑一九四―二二六

第三 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシトキ刑二〇二―二二二

第四 證人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ因  
リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシトキ刑二三三―二三五

第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ  
以テ廢棄若クハ破毀セラレタリシトキ刑二二二、刑訴二五〇、二九二、三〇一―三〇九

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノ  
ヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立テラレタル判決ト牴觸スルトキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スルコトヲ得ザリシ證書ニシ  
テ原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタ  
ルトキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ付テ判決カ確定ト爲リタルト  
キ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキ  
ニ限リ再審ヲ求ムルコトヲ得刑訴八、六、一八三

第四百七十條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過失ニ非スシテ前訴訟手續ニ  
於テ殊ニ故障又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサ  
リシトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得四七八

第四百七十一條 不服ヲ申立テラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於

ヲ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得  
但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルトキニ限ル三九七、四三三、四六七

第四百七十二條 再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管  
轄ニ專屬ス三二、二〇六

同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級ノ裁判所又ハ一分ハ上級ノ裁判所ニ於テ爲シタル數箇  
ノ判決ニ對スル訴ハ上級ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對シ再審ヲ求ムル訴ハ其命令ヲ發  
シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レトモ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ  
請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス二二六、三九〇、三九一

第四百七十三條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケ  
サル限りハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準  
用ス三七三—三八一、一九〇—二七二、三九六—四三一、四三二—四五四

第四百七十四條 訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ四〇〇ノ一四三七ノ一

此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被  
告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタルトキハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

判決確定ノ日ヨリ起算シテ五午ノ滿了後ハ訴ヲ爲スコトヲ得ス

前二項ノ規定ハ第四百六十八條第四號ノ場合ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提  
起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ送達ニ因リ判決アリタルコトヲ知  
リタル日ヲ以テ始マル

第四百七十五條 訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス四〇一ノ二、四三八ノ二、四七六、四  
七八、一九〇、四〇一、四三八、三七

四

第一 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受クル判決ノ表示

第二 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且不服ノ理由ノ表示、此

理由及ヒ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テノ證據方法又如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀ス可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立ヲモ掲ク可シ一〇五一一〇八、四六八、四六九、四七九

何々請求事件ノ(取消)(原狀回復)ノ訴

府縣市町村番地族業

原告人 氏

府縣市町村番地族業

被告人 氏

右當事者間ノ年(何)第何號何事件ニ付キ年月日何裁判所ニテ言渡シタル判決ハ確定シタルヲ以テ茲ニ(取消)

(原狀回復)ノ訴ヲ提起仕候也

判決ノ表示

年(何)第何號事件ニ付キ年月日何裁判所ヨリ何々ト言渡シタル判決ノ送達ヲ受ケタリ

(取消)(原狀回復)ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述

原判決ニ於テ何々ト判決シタルモ何々ノ原因(四六八ノ一號乃至四號ノ取消原因)(四六九ノ一號乃至七號ノ

原狀回復ノ原因)アリテ原判決ノ全部又ハ何々ノ一部ハ不當ナリ云々……仍テ其判決ノ全部又ハ一部ヲ廢棄若クハ破毀ヲ要ムル爲メ(取消)(原狀回復)ノ訴ヲ提起シタル次第ナリ

證據方法

何々ニ(何號證)ニ因リテ不服ノ理由ヲ知了シタル云々……立證ス

一定ノ申立

右ノ理由ナルヲ以テ原判決ノ全部又ハ一部ヲ廢棄若クハ破毀シタル上更ニ何々トノ判決相成度候也

年月日

原告人

氏

名

(注意、答辯書ハ第一九九條ノ文例ニ準スヘシ)(四七三)

第四百七十六條 判然許ス可カラサル訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ  
四六七ノ一、四六八、四六九、四七〇、四七八、四七五、四七六、四七七、四七八、四七九、四八〇、四八一、四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇、五〇一、五〇二

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得四六六

本條ノ却下ノ決定ハ第一九二條ノ文例ニ準ス又右ニ對スル抗告ノ文例ハ抗告ノ部ニ在ル各文例ニ準ス可シ

實例民事訴訟法 再審

第四百七十七條 原告ハ口頭辯論ノ期日ニ於テ相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラヌ再審ヲ

求ムル理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニスル事實ヲ疏明ス可シ四六八、四六九、四七四、四七五

第四百七十八條 許ス可カラサル訴又ハ法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後

ニ起シタル訴ハ職權ヲ以テ判決ニ因リ不適法トシテ之ヲ棄却ス可シ四七六、四〇二、四一九

第四百七十九條 本案ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限り更

ニ之ヲ爲ス可シ四六八、四六九

裁判所ハ本案ニ付テノ辯論前ニ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲

スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯論ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付テノ

辯論ノ續行ト看做ス三九七、四三三

第四百八十條 原告ノ不利益ト爲ル判決ノ變更ハ相手方カ再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變

更ヲ申立テタルトキニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス四二五、三三〇一

第四百八十一條 訴カ上告裁判所ニ屬スルトキハ上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ

其許否ニ付テノ辯論ノ完結カ係爭事實ノ確定及ヒ斟酌ニ繫ルトキト雖モ其完結ヲ爲  
ス可シ四四六

第四百八十二條 上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲スコト  
ヲ得ヘキトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得三九六、四三二

第四百八十三條 第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ第三者ノ債權ヲ詐害スル目的ヲ  
以テ判決ヲ爲サシメタリト主張シ其判決ニ對シ不服ヲ申立ツルトキハ原狀回復ノ訴  
ニ因レル再審ノ規定ヲ準用ス民四二四

此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲ス四八

本條ノ訴ハ第四七五條ノ訴ノ文例ニ準ス可シ

### 第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付  
ヲ目的トスル請求ハ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スル

コトヲ得ヘキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得三八二、八七、四八七、民四〇〇、  
四〇一、商二五―二八

第四百八十五條 訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴フル旨ノ陳述ヲ掲ケ且證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

本條ノ訴狀ノ文例ハ第一九〇條ノ文例ニ準ス可シ但シ證書訴訟ト記載スルコトヲ要ス

(注意、答辯書ノ文例ハ第一九九條ノ文例ニ準ス可シ)

第四百八十六條 本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ付キ辯論ノ分離ヲ命スルコトヲ得三七九ノ二、四  
一四ノ二、二〇六、二〇七、二三五

第四百八十七條 反訴ハ之ヲ爲スコトヲ得ス

證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ證書ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得

書證ノ申出ハ證書ノ提出ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得三三四

第四百八十八條 原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニテ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得一九五

第四百八十九條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見エ又ハ被告ノ抗辯ニ因リ理由ナシト見ユルトキハ原告ノ請求ヲ却下ス九、二四八、二二九

證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサル場合ニ於テハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許ササル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ四八  
四、四八五

第四百九十條 證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサルトキハ被告ノ異議ハ證書訴訟ニ於テ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ四八七

第四百九十一條 主張シタル請求ヲ争ヒタル被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總テノ場合ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ三二九

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ之ヲ終局判決ト看做ス四二六、三九六、四三二、四二六、四三三、四四八、四五二、五〇四、五〇五、五二二

本條ノ判決ハ第二三六條ノ判例ニ準ス但シ被告カ請求ヲ争ヒタルトキハ其權利ノ行使ヲ留保スル旨ヲ示ス可シ第四九〇條ノ異議ノ却下ヲ言渡シタルトキハ其旨ヲモ記ス可シ

第四百九十二條 被告ニ權利ノ行使ヲ留保シタルトキハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス一九五、一八八ノ三、四二七、四九〇、二四〇、四八八、四九〇

此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且其生セシメタル費用ノ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ

原告ニ言渡シ又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ七二、四二七、四六、二四七

右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ闕席判決ニ關スル規定ヲ準用ス二四六、二四七

本條第二項ニ因リ通常訴訟トナリタルトキノ判決ノ文例ハ第二三六條ノ文例ニ準ス可シ但シ原告ノ敗訴トキハ其主文ニ前判決(證書訴訟ノ判決)ヲ廢棄シ其請求ヲ却下ト判示シ被告敗訴ノ時ハ前判決ハ之ヲ維持ト判示ス可シ

第四百九十三條 第四百二十六條及ヒ第四百二十七條ノ規定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス四九一

第四百九十四條 商法ニ規定シタル手形ニ因ル請求ヲ證書訴訟ヲ以テ主張スルトキハ爲替訴訟トシテ以下二條ニ掲ケル特別ノ規定ヲ適用ス商四三四、四四四、携二二八

第四百九十五條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁



判所ニ之ヲ起スコトヲ得一〇一四、一九、二四ノ二、商四四五、四五二

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受ク可キトキハ支拂地ノ裁判所又ハ被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所各之ヲ管轄ス二五

第四百九十六條 訴狀ニハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ掲クルコトヲ要ス四八五

訴ノ許ス可キモノナルトキハ直チニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム四八四、四八五、一九〇

口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニハ少ナクトモ二十四時ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス一九四

ス一九四

本條ノ訴狀ハ第四八五條第一九〇條文例ニ準ス答辨書判決其他ノ文例ハ證書訴訟ト同シクシテ一般ニ關スル訴訟ノ文例ニ準ス可シ

第六編 強制執行

第一章 總則

第四百九十七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ

因リテ之ヲ爲ス五〇一五〇三、四二六、四九一、五五九、七四八、七五六、商一〇四九

第四百九十八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル

期間ノ滿了前ニハ確定セサルモノトス二五五ノ二、一七七ノ二、二六三、三九八、四〇〇ノ一、四三七ノ一、四五四

判決ノ確定ハ故障若クハ上訴ヲ其期間内ニ申立若クハ提起スルニ因リ之ヲ遮斷ス二

〇七、二二八、二六四、三九九、四五四

第四百九十九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムルトキハ第一審裁

判所ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス六三〇ノ三、六三八、七三六、二五五ノ二、四〇〇ノ三、四三七ノ一

訴訟カ猶ホ上級審ニ於テ繫屬中ナルトキハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタ

ル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス四三一、四五四ノ八、一六七

判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ證明書ヲ付與スルコトヲ得サルトキニ限  
リ上訴ヲ管轄スル裁判ノ書記カ不變期間内ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メタル證明書  
ヲ以テ足ル四六六、四六五、五五八、民印一〇

判決確定ノ證明申請

府縣市町村番地族業

原告人 氏 名

府縣市町村番地族業

被告人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ニ付キ年月日何裁判所ニテ判決言渡アリ、年月日送達シタル判決ノ確定  
(又ハ不變期間内ニ上訴ノ提起ナキ)證明相成度申請仕候也

年月日

原告人 氏 名

何々裁判所宛

證明書

原告人 氏 名

被告旗 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ノ判決ハ其不變期間ニ上訴ノ提起ナク確定シタルコトヲ證明ス

年月日

何裁判所

裁判所書記

氏

名

第五百條 原狀回復又ハ再審ヲ求ムル申立アルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テ  
シメ又ハ保證ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ一時停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立  
テシメテ強制執行ヲ爲ス可キコトヲ命シ及ヒ保證ヲ立テシメテ其爲シタル強制處分  
ヲ取消ス可キヲ命スルコトヲ得一七四一七七、四六七一四八二、八七  
保證ヲ立テシメスシテ爲ス強制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ償フコト能ハサル損害ヲ  
生ス可キコトヲ説明スルトキニ限り之ヲ許スニニ〇

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコ

實例民事訴訟法 強制執行 總則

トヲ得ス一〇三、三九七、四三三

強制執行停止ノ申請(其他ノ申立ハ之ニ準ス)

二八六

府縣市町村番地族業

申立人 氏 名

府縣市町村番地

被申立人 氏 名

右當事者ノ年何第何號何々事件ニ付キ年月日何裁判所ニ於テ與ヘタル判決ニ對シ申立人ハ年月日(原狀回復)再審ノ申立ヲ爲シタルニ付キ本按判決確定マテ一時強制執行ヲ停止相成度候也

年月日

申立人 氏 名

何地何區裁判所判事 氏 名殿

決定(其他ノ申立ニ因ル決定ハ之ニ準ス)

府縣市町村番地族業

申立人 氏 名

府縣市町村番地

被申立人 氏 名

右當事者間ノ何々事件ニ付キ申立人ハ年月日何裁判所ノ言渡シタル判決ニ對シ(原狀回復)(再審ノ申立チナシ其強制執行ヲ一時停止スルノ命令ヲ發セラレタキ旨ノ申立チナシ當裁判所ハ其申立チ相當ト認メ保證金何圓ノ供託ヲ命ジ申立人ハ保證トシテ金何圓ヲ供託シタリ仍テ當裁判所ハ如左決定ス  
何々強制執行ハ本按ノ判決アルマテ一時之ヲ停止ス

年月日

何區裁判所

判事 氏 名

第五百一條 左ノ判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ四九七、五〇二、五〇三、五〇七、五一二

第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決三二九

第二 證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決四八八、四九六

第三 同一審ニ於テ同一ノ原告若クハ被告ニ對シ本案ニ付キ言渡シタル第二又ハ

其後ノ闕席判決二六三

第四 假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決七四五、七四七、七五六

實例民事訴訟法 強制執行 總則

二八七

第五 養料ヲ支拂フ義務ヲ言渡ス判決但訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前最後ノ三個月間ノ爲ニ支拂フ可キモノナルトキニ限ル六二四、一號、民九五四一九六三

第五百二條 左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟構一七、民二九五、以下

第二 占有ノミニ係ル訴訟民一八〇、以下

第三 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一箇年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟民六二六

第四 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟商三三三

イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

ロ 旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷

物、金錢又ハ有價物

第五 此他財産權上ノ請求ニ關シ金額又ハ價額ニ於テ貳拾圓ヲ超過セサル訴訟但其物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ適用ス五〇四、五〇五、五〇七

假執行宣言ノ申立(注意此申立ハ口頭辯論ノ時口頭ニテ申立ルコトヲ得ヘシ)

府縣市町村番地族業

原告人 氏 名

府縣市町村番地族業

被告人 氏 名

右當事者間ノ年(何)第何號何事件ニ付キ判決言渡ト全時ニ民事訴訟法第五百二條第一項第何號ニ依リ假執行ノ宣言相成度候也

年月日

原告人 氏 名

何裁判所判事 氏 名 殿

第五百三條 第二條ニ掲ケタル外左ノ場合ニ於テハ財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限

實例民事訴訟法 強制執行 總則

リ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲スコシ

第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント申出ツルトキ八七、五二九ノ二

第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行ヲ中止セハ償ヒ難キ損害又ハ計リ難キ

損害ヲ受ク可キコトヲ疏明スルトキ二〇、五〇六、五〇七、五〇八、二四二、二四三、五〇九

第五百四條 債務者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復スルコトヲ得サル損

害ヲ受ク可キコトヲ疏明シタルトキハ其申立ニ因リ左ノ宣言ヲ爲スコシ 五〇一—

第一 第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可カラサルコト

第二 第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下ス

ルコト五〇七

假執行(申立却下)(チヌ可カラスト)ノ申立(注意此申立ハ口頭辯論ノ時  
口頭ニテ申立ルコトヲ得)

府縣市町村番地族業

申立人 氏 名

府縣市町村番地族業

被申立人 氏 名

右當事者間ノ何事件ニ付キ原告人ハ何號證ノ如ク無實力者ナルヲ以テ本按ノ判決ヲ假リニ執行セラル、ニ於  
テハ回復スヘカラサル損害ヲ蒙ル可ク候間民事訴訟法第五百四條第一項第何號ニ因リ假執行(ノ申立ヲ却下  
(チ爲スコカラスト)トノ宣言相成度申請仕候也

附屬書類

一何々

年月日

申立人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

第五百五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ債權者豫メ保證ヲ立ツル

トキハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルコトヲ得 五〇一—五〇三、八七

債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコトヲ申出テサルトキハ債務者ノ申立ニ因リ債務  
者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カルルコトヲ許スコシ 五〇四、五  
一三、六〇

七、五五〇ノ三號(三五、法一五、供託法、大令供託物取扱規程)

實例民事訴訟法 強制執行 總則

リ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント申出ツルトキ八七、五二九ノ二

第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行ヲ中止セハ償ヒ難キ損害又ハ計リ難キ

損害ヲ受ク可キコトヲ疏明スルトキ二〇、五〇六、五〇七、五〇八、二四二、二四三、五〇九

第五百四條 債務者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復スルコトヲ得サル損

害ヲ受ク可キコトヲ疏明シタルトキハ其申立ニ因リ左ノ宣言ヲ爲ス可シ 五〇一—

第一 第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可カラサルコト

第二 第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下ス

ルコト五〇七

假執行(申立却下)(チラス可カラスト)ノ申立(注意此申立ハ口頭辯論ノ時)

府縣市町村番地族業

申立人 氏 名

府縣市町村番地族業

被申立人 氏 名

右當事者間ノ何事件ニ付キ原告人ハ何號證ノ如ク無資力者ナルヲ以テ本按ノ判決ヲ假リニ執行セラル、ニ於テハ回復スヘカラサル損害ヲ蒙ル可ク候間民事訴訟法第五百四條第一項第何號ニ因リ假執行ノ申立ヲ却下(チ爲ス可カラスト)トノ宣言相成度申請仕候也

附屬書類

一何々

年月日

申立人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

第五百五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ債權者豫メ保證ヲ立ツル

トキハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルコトヲ得五〇一—五〇三、八七

債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコトヲ申出テサルトキハ債務者ノ申立ニ因リ債務

者ニ保證ヲ立ラシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カルルコトヲ許ス可シ 五〇四、五

七、五五〇ノ三號(三五、法一五、供託法、大令供託物取扱規程)

實例民事訴訟法 強制執行 總則

第五百六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

五〇二、五〇三

第五百七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ之ヲ掲ク可シ五〇一—五一一

第五百八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ於テ假執行ニ付テノ裁判ヲ

爲ササルトキ又ハ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ債權者ノ申立ヲ看過シタルトキハ第二

百四十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲スコトヲ得五〇一—五〇

三、五〇四、五〇五、二四二、二四三

第五百九條 第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ假執行ノ宣言ナカリシモノ又ハ條件附ノ

假執行ノ宣言アリタルモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ申立テサル部分ニ限り口頭辯論ノ進

行中ニ爲シタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ其判決ニ假執行ノ宣言ヲ

付ス可シ五〇一、五〇三—五〇五、四五五、五五〇、一號

第五百十條 本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スル判決ノ言渡

アルトキハ假執行ハ其廢棄若クハ破毀又ハ變更ヲ爲ス限度ニ於テ效力ヲ失フ二六一、

四二〇—四二五、四四五—四四七、五一七

假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スルトキハ判決ニ基キ

被告ノ支拂又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡ス

可シ四二七ノ二、四九二ノ二

第五百十一條 第二審ニ於テハ申立ニ因リ先ツ假執行ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ  
二二七

口頭辯論ノ延期ニ付テノ第四百十條ノ規定ハ此場合ニ於テハ之ヲ適用セス

第二審ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百十二條 假執行ノ宣言ヲ付シタル判決ニ對シ故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルト

キハ第五百條ノ規定ヲ準用ス五〇〇、三九四

第五百拾二條

實例民事訴訟法 強制執行 總則

本條ノ強制執行停止ノ文例ハ第五百條ノ文例ニ準ス

第五百十三條 本編ノ規定ニ從ヒ原告若クハ被告ニ保證ヲ立ツル義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ許シタル場合ニ於テハ原告若クハ被告ハ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ得  
五〇〇、五〇三ノ一號、五〇五、五二二、五二二ノ二、五四七ノ二、五四九ノ四、  
六五六ノ二、七四一ノ二、七四三、七四五ノ二、七四七ノ一、七五九  
保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタルコトニ付テハ求ニ因リ證明書ヲ付與ス可シ

供託證明申請

府縣市町村番地族業  
申請人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被申請人 氏 名  
申請人 氏 名

何裁判所御中

右當事者間ノ何事件ニ付キ御命令ニ相成リタル何々ハ供託シタルコトヲ御證明相成度申請仕候也

證 明 (注意申請書ノ末尾ニ記スルモ可ナリ)

右年月日氏名ノ供託シタルコトヲ證明ス  
年 月 日

何裁判所 書記 氏 名

第五百十四條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ハ本邦ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナルコトヲ言渡シタルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得<sup>一五三、一五五ノ二、二八一</sup>  
執行判決ヲ求ムル訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄ス

執行判決請求ノ訴

府縣市町村番地  
原告人 氏 名  
府縣市町村番地

實例民事訴訟法 強制執行 總則



何外國裁判所判決ノ表示

何國裁判所ニ於テ左ノ如ク判決相成確定仕候也

判決要旨ヲ摘載ス

右ノ如ク判決セラレ確定致候間執行判決被成下度請求仕候也

附屬書類

一何々

年月日

何裁判所判事 氏 名殿

原告人 氏 名

判決

府縣市町村番地族業

原告人 氏 名

府縣市町村番地族業

被告人 氏 名

右當事者間ノ何國裁判所(外國)ノ判決ニ付キ原告人ハ執行判決ヲ要メタリ仍テ當裁判所ハ判決スル左ノ如シ

主 文

何國何裁判所ノ判決ハ適法ナルヲ以テ其判決ヲ以テ執行スヘシ

理 由

原告人ノ申立ハ何々ト云フニ在リテ何國裁判所ノ判決ハ適法ナルヲ以テ主文ノ如ク判決ス

何裁判所 判 事 氏 名

第五百十五條 執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セスシテ之ヲ爲ス可シ

執行判決ヲ求ムル訴ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ却下ス可シ

第一 外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リタルコトヲ證明セサルトキ四九八

第二 本邦ノ法律ニ依リ強テ爲サシムルコトヲ得サル行爲ヲ執行セシム可キトキ

明治八年八月十四日二二八號、布告、全元年四月布告、片烟禁止法、憲二三

第三 本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管轄權ヲ有セサルトキ

第四 敗訴ノ債務者本邦人ニシテ應訴セサリシトキ但訴訟ヲ開始スル呼出又ハ命

實例民事訴訟法 強制執行 總則

令ヲ受訴裁判所所屬ノ國ニ於テ又ハ法律上ノ共助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送達セサリシトキニ限ル

第五 國際條約ニ於テ相互ヲ保セサルトキ

第五百十六條 強制執行ハ執行文ヲ付シタル判決ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス 五一七―五二四、四九九、五五九、五六〇

執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ書記又訴訟カ上級裁判所ニ繫屬スルトキハ其裁判所ノ書記之ヲ付與ス

執行力アル正本ヲ求ムル申立ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得 一三五

執行文附與ノ申請

府縣市町村番地族業

原告人 氏 名

府縣市町村番地族業

被告人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何事件ニ付キ年月日何裁判所ニ於テ言渡サレタル判決ハ確定仕候間執行文附與相成

度候也

年月日

原告人 氏 名

名

何裁判所御中

第五百十七條 執行文ハ判決ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス 五五九、五六〇

其文式左ノ如シ

前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ強制執行ノ爲メ原告某若クハ被告某ニ之ヲ付與ス

執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押ス可シ

前記ノ正本ハ被告氏名若シクハ原告氏名ニ對シ強制執行ノ爲メ原告氏名若シクハ被告氏名ニ之ヲ付與ス

年月日

何裁判所

書記

氏

名

(法意、此執行文ハ判決ノ正本ノ末尾へ記入スルモノトス)

第五百十八條 執行力アル正本ハ判決ノ確定シタルトキ又ハ假執行ノ宣言アリタルト

實例民事訴訟法 強制執行 總則

キニ限り之ヲ付與ス四九七、五一六、五四五、五四六  
判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ保證ヲ立ツルコトニ繋ル場合ノ外他ノ條件ニ繋ル場合ニ  
於テハ債權者カ證明書ヲ以テ其條件ヲ履行シタルコトヲ證スルトキニ限り執行力ア  
ル正本ヲ付與スルコトヲ得五二九、五三〇、五三一

第五百十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ之ヲ付與シ  
又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼  
カ裁判所ニ於テ明白ナルトキ又ハ證明書ヲ以テ之ヲ證スルトキニ限ル 五二〇、五二一、  
五四一、五八六、  
一三、民九八六、九九二

此承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキハ之ヲ執行文ニ記載ス可シ

承繼ニ付キ執行文付與ノ申請

府縣市町村番地族業  
原告人 氏 名  
府縣市町村番地族業

被告人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何事件ニ付キ年月日何裁判所ノ判決ニテ強制執行致候處氏名ハ年月日死亡シ年月日  
被告人ハ家督ヲ相續致シ候ニ付キ承繼人トシテ被告ニ對シ執行文付與相成度申請仕候也

證據書類

一何々

年月日

原告人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、執行文ハ第五百十六條ノ如ク正本ノ末尾ニ付記ス)

第五百二十條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テハ執行力アル正本  
ハ裁判長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得

裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得五五八

右命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ

裁判長ノ正本付與ヲ拒絕シタル時ハ即時抗告ヲナスコトニ得其文例ハ第四百五十七條ノ文例ニ準ス

第五百二十一條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ニ依リ必要ナル證明ヲ爲ス能

實例民事訴訟法 強制執行 總則

ハサルトキハ債權者ハ判決ニ基キ執行文ノ付與ニ付キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起  
スコトヲ得五六三

執行文付與ノ訴

府縣市町村番地族業

原告人 氏

名

府縣市町村番地族業

被告人 氏

名

目的物

年(何)第何號何事件ニ付キ執行文付與

事實

原告人ハ年(何)第何號何々事件ニ付キ年月日何裁判所ノ判決ニ基キ被告人へ何々條件ヲ履行シタルモ被告人ハ  
其證明ヲナササルヲ以テ云々其執行文ヲ付與スト判決ヲ要ム云々(事ヲ記載ス)

證據方法

何

一定ノ申立

被告人ニ對シ何々ノ義務ヲ履行スヘク執行文付與被成下度候也

年月日

原告人

氏

名

何々裁判所判事 氏

名(一審ノ受訴裁  
判所へ專屬ス)

右ニ對スル判決ノ文例ハ第二百三十六條ノ文例ニ準ス

第五百二十二條 執行文ノ付與ニ對シ債務者カ異議ヲ申立テタルトキハ其執行文ヲ付

與シタル裁判所書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス五二六ノ二、五六二ノ二

裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊ニ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメ

スシテ強制執行ヲ一時停止シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キヲ命スル

コトヲ得五五〇ノ二號

執行文付與ニ付テノ異議ノ申立

府縣市町村番地族業

申立人 氏

名

實例民事訴訟法 強制執行 總則

府縣市町村番地族業  
被申立人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ニ付キ年月日何裁判所ニテ判決相成リ年月日其判決ハ何裁判所書記ハ執行文ヲ付與シタルモ其判決ハ何々トシテ執行スヘカラサルヲ以テ付與シタル執行文御取消相成度申請仕候也

立證書

何々ヲ以テ立證仕候

附屬書類

一何々

年月日

原告人 氏 名

何裁判所判事 氏 名殿



決定

府縣市町村番地族業  
申立人 氏 名

府縣市町村番地族業

被申立人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ニ付キ年月日裁判所書記ノ付與シタル執行文ヲ不當トシテ申立人ハ異議ノ申立ヲナセリ當裁判所ハ各證據ヲ審査シ決定スル如左  
本件執行文ハ之ヲ取消ス

年月日

何裁判所 判事 氏 名

(注意、職權ニテ仮處分ヲナス時ハ此決定言渡ノ中ニ記載シ全時ニ言渡ス可シ)

第五百二十三條 債權者カ執行力アル正本ノ數通ヲ求メ又ハ前ニ付與シタル正本ヲ返還セスシテ更ニ同一判決ノ正本ヲ求ムルトキハ裁判長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得五二六

裁判長ハ其命令ノ前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得  
相手方ヲ審訊セスシテ執行力アル正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルトキハ其旨ヲ相手方ニ通知ス可シ五五八

實例民事訴訟法 強制執行 總則

正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルトキハ其旨ヲ明記ス可シ

執行文(數通)(再度)付與申請

府縣市町村番地族業

原告人 氏 名

府縣市町村番地族業

被告人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號事件ニ付キ年月日言渡ノ判決ニ(基キ執行セムトスルモ被告人ノ財産各所ニ散在スルニ因リ之ヲ同時ニ差押ヘントスルニハ一通ニテハ爲シ能ハサルヲ以テ執行文何通(因リ年月日執行文ノ付與ヲ得タルモ右ハ紛失シタルヲ以テ更ニ執行文付與相成度申請仕候也

年月日

原告人

氏

名

何裁判所判事 氏 名殿

(注意、執行文ハ五一七條ノ文例ニ準ス)

第五百二十四條 執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲ニ之ヲ付與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ五一八一五二〇、四三一、四五四

第五百二十五條 執行力アル正本ノ效力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラス

總テ本邦ノ裁判區域内ニ及フモノトス五五九

第五百二十六條 債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辨

濟ヲ得ル能ハサルトキハ數通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ

同時ニ強制執行ヲ爲ス權利ヲ有ス五二三、五六四

第五百二十七條 債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ

事務所ヲモ有セサルトキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ一

四三ノ一

仮住所届

府縣市町村番地

債權者 氏 名

名

右ハ年何第何號何事件ノ強制執行ニ付キ住所氏名方ヲ仮住所ト相定メ候間及御届候也

年月日

債權者 氏 名

名

實例民事訴訟法 強制執行 總則

第五百二十八條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受クル者ノ氏名ヲ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ表示シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り之ヲ始ムルコトヲ得五五九、五六〇、六五、五一九、四〇〇、四三七、五九八、六四〇、以下七三四、七三四

判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來ニ繫ルトキ又ハ判決ノ執行カ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ爲シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行ス可キ判決ノ外尙ホ之ニ附記スル執行文ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルコトヲ要ス五一八、五一九、五五二、五五三、五一七

若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ亦其證書ノ謄本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百二十九條 請求ノ主張カ或ル日時ノ到來ニ繫ルトキハ其日時ノ滿了後ニ限り強制執行ヲ始ムルコトヲ得五一八、五一九

若シ執行カ債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ繫ルトキハ債權者カ保證ヲ立テタルコトニ付テノ公正ノ證明書ヲ提出シ且其謄本ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り其執行ヲ始ムルコトヲ得五〇三、一號、五〇五

第五百三十條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上斑司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限り之ヲ始ムルコトヲ得一一

此官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ執細四九ノ二、三號

第五百三十一條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限り執達吏之ヲ實施ス五六六、五九三、六〇三、六〇六、七三〇、七三二、六四三、六五九、六六三、六六九、七〇二、七〇三、七五二、七六五、六二六、六三九、六四〇、以下

債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲ニ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得一七、三〇、九四一、一〇〇、九八、執一

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第五百三十二條 執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リテ爲ス行爲及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨ

リシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生セシメタルトキハ第一ニ其責ニ任ス五三  
四、五四〇、五四一、五四二、五六六、五七〇、六五九、六六三、五三五、五三七、五三九、五七一

**第五百三十三條** 債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行ヲ委任シタルトキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルトキト雖モ支拂其ノ他給付ヲ受取リ其受取リタルモノニ付キ有效ニ受取ノ證書ヲ作り之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ交付スルコトヲ得五三四

**第五百三十四條** 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行爲ヲ實施スル權利ヲ有ス債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得ス五三一、五三三

執達吏ハ其正本ヲ携帶シ關係人ノ求アルトキハ其資格ヲ證スル爲ニ之ヲ示ス可シ  
**第五百三十五條** 執達吏ハ債務者カ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本及ヒ受取ノ證ヲ之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シタルトキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ

附記シ且受取ノ證ヲ債務者ニ交付ス可シ執細二二、二三、八一

債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムル權利ハ前項ノ規定ニ因リテ妨ケラルルコト無シ

**第五百三十六條** 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ筐匣ヲ開カシムル權利ヲ有ス憲二五、執細五〇

抵抗ヲ受クル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用キ且警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要スルトキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ可シ五五五

**第五百三十七條** 執達吏ハ執行行爲ヲ爲スニ際シ抵抗ヲ受クルトキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行行爲ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シタル其家族若クハ雇人ニ出會ハサルトキハ成丁者二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハシム可シ

四五、執細五〇ノ七

**第五百三十八條** 強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニハ其求ニ因リ執達吏ノ記



録ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記録中ニ存スル書類ノ謄本ヲ付與スルコトヲ要ス 五四九、五六五、  
明治二十三年、法五二號、執達吏手數規則、二三ノ一號、一四ノ一號、

第五百三十九條 夜間及ヒ日曜日並ニ一般ノ祝祭日ニハ執行裁判所ノ許可アルトキニ  
限リ執行行爲ヲ爲スコトヲ得一五〇、五四四、執細七、八

右許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示ス可シ

(夜間)(日曜日)執行許可ノ申請(其他ノ申請之レニ準ス、數通ヲ要ス)

府縣市町村番地族業

申請人 氏 名

府縣市町村番地族業

被申請人 氏 名

右當事者間何年(第何號)何々執行事件ニ付キ被申請人ハ晝間労働ノ爲メ一家外出シテ住宅ハ戸締ニテ執行ヲ爲シ能ハス夜間ニハ在宅ニ付キ其時ニ於テ執行仕度候間夜間ニ執行御許可相成度申請仕候也

年月日

申請人 氏 名

何區裁判所判事 氏 名殿

決定(注意此決定ハ申請書ノ末尾ニ記載スルモ可ナリ)

右申請ハ理由アルヲ以テ左ノ如ク決定ス

本按ノ執行ハ夜間ニ執行スルコトヲ許可ス

年月日

何區裁判所 判事 氏 名

第五百四十條 執達吏ハ各執行行爲ニ付キ調書ヲ作ル可シ五三八

此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス執細五二、六三、七二、七三、一四

第一 調書ヲ作りタル場所、年月日

第二 執行行爲ノ目的物及ヒ其重要ナル事情ノ略記五三六、五三七

第三 執行ニ與リタル各人ノ表示五三七

第四 右各人ノ署名捺印

實例民事訴訟法 強制執行 總則

第五 調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閱覽セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示

第六 執達吏ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルトキハ其理由ヲ記載ス可シ

何々執行調書

年何第何號何々事件ニ付キ債權者氏名ノ委任ニ因リ年月日債務者氏名ニ對シ何々ノ執行ヲ爲タル調書ヲ作ルコト如左

- 一 債務者住宅ニ於テ年月日此調書ヲ作ル
  - 二 此執行ハ何々ヲ以テ目的トス又何々ノ事情アリ若クハナシ
  - 三 債務者又ハ第三債務者本人代理人立會
- 右調書ハ之ヲ讀聞セタルニ承諾ノ上署名捺印セリ

債權者	氏	名	印
債務者	氏	名	印
執達吏	氏	名	

年月日

第五百四十一條 執行行爲ニ屬スル催告其他ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書ニ之ヲ記載ス可シ五三六、五七〇、六六三、五九一、執細五〇

若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ爲ス能ハサルトキハ第三百三十九條、第四百十條及ヒ第四百十五條乃至第四十九條ノ規定ヲ準用シテ其調書ノ謄本ヲ送達シ又別ニ送達證ヲ作ラサルトキハ調書ニ其送達ヲ爲シタルコトヲ記載ス可シ

若シ強制執行ノ地ニ於テモ執行裁判所ノ管轄内ニ於テモ送達ヲ爲ス能ハサルトキハ催告又ハ通知ヲ受ク可キ者ニ郵便ヲ以テ調書ノ謄本ヲ送達シ且之ヲ郵便ニ付シタルコトヲ調書ニ記載ス可シ五九〇、一四三ノ三、一三六ノ三、五四二

第五百四十二條 執行行爲ノ際債務者ニ爲ス可キ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在明カララサルトキ又ハ外國ニ在ルトキハ之ヲ必要トセス一五二、一五三、一五六、一五八

第五百四十三條 此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行行爲ノ處分又ハ其行爲ノ共力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス五九四、以下六四〇以下七一七、以下七三二、七四八、以下六二六、以下五三六、五五五、五五六

法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各箇ノ場合ニ於テハ執行手續ヲ爲ス可キ地又  
ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ執行裁判所ト看做ス 五四五ノ一、五四九ノ三  
五五七、五六二、五九五、  
六一六ノ一、六二二、六四一、七一八、七三三、七三四、七三九、七五〇、七五一

執行裁判所ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得五五八

抗告ハ第四百五拾七條ノ文例ニ準ス

第五百四十四條 強制執行ノ方法又ハ執行ニ際シ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申  
立及ヒ異議ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ  
定メタル命ヲ發スル權ヲ有ス 五八五、五六一、五三〇、五三九、五六四、五七〇、六一八、  
五六十、五二二、五三三、六五七、六五八、五五四、  
執達吏カ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行行爲ヲ實施スルコトヲ拒ミ  
タルトキ又ハ執達吏ノ計算セシ手数料ニ付キ異議アルトキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判  
スル權ヲ有ス五五四、五六七、五五八、五七五、五七六、掛九七、執八、執細一七、八一、四二、民費一六

強制執行手續ニ對スル異議ノ申立(他異議ノ申立ノ  
文例ハ之ニ準ス)

府縣市町村番地族業  
申立人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被申立人 氏 名

被申立人ヨリ申請人ニ係ル強制執行事件ニ付キ執達吏ハ裁判所ノ許可ヲ得ス夜間申請人ノ住居ニ臨ミ別紙目  
録ノ有体動産ノ差押ヲナシタルハ違法タルヲ以テ右差押御取消シ相成度申請仕候

附屬書類

一何々

年月日

申請人 氏 名

何區裁判所判事 氏 名殿  
強制執行停止ノ申立

府縣市町村番地族業  
申立人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被申立人 氏 名

實例民事訴訟法 強制執行 總則

被申立人ヨリ申立ニ係ル強制執行ニテ申立人ノ有体動産ヲ差押タルモ執達吏ノ違法ニ因ル差押ヘナルヲ以テ當裁判所ヘ執行異議ノ申立ヲ提出シタリ然ルニ執達吏ハ引續キ右有体動産ニ對シ競賣ヲナサントシ競賣期日ヲ何月日ト定メ候間異議ノ裁判マテ強制執行一時停止相成度申立仕候也

附屬書類

一何々

年月日

申立人 氏 名

何區裁判所判事 氏 名殿

決定

府縣市町村番地族業  
申立人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
被申立人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ニ付キ 議ノ申立ヲナシタルヲ以テ當裁判所ハ決定 ル如左

本、有体動産ノ差押ヘハ之ヲ取消ス(又ハ異議ノ申立ハ之ヲ却下ス)

理由

申立人(何々ノ申立ハ理由アルヲ以テ)(又ハ何々ト云フモ理由ナキヲ以テ)主文ノ如ク決定ス

年月日

何區裁判所 判事 氏 名

(注意、却下ノ決定ニ對シテハ抗告スルヲ得其文例ハ五百四十三條ノ文例ニ準ス五五八)

強制執行停止決定

府縣市町村番地族業  
申立人 氏 名  
府縣市町村番地族業  
破申立人 氏 名

右當事者間ノ年何第何號何々事件ニ付キ申立人ヨリ別紙目錄ノ物件ニ付キ強制執行ノ方法ニ付キ異議ノ申立ヲナシ且ツ其執行ノ停止ヲ命セラレシ事ヲ申立タリ當裁判所ハ其申立ヲ相當認メタルニ因リ申立人ニ金何圓ノ保證ヲ立テシメ強制執行ヲ本按ノ決定アルマテ一時之ヲ停止スヘキコトヲ命ス

實例民事訴訟法 強制執行 總則